

# 新句月本

第二卷 第三號



明治四十四年四月二十七日第三種郵便物認可  
昭和二十一年一月二日 每月一回（一月）發行

昭和二十年十二月二十五日印刷納本

一 月 號

俳句 日本作品

秋山秋紅蓼

山の夕日に娘さん稲を背負うてどちらも山  
疎開の醫者に疎開者が来て冬山としぬくとく  
山を身ちかに住むにいよいよ冬、月夜となる  
空に雪山のかたち鋭くて暮れ早い月となる  
稲架が並んで朝、アルプスの前山にも雪の来て  
金も銀もいくさにゆかせてからの梅が白く咲く  
たたかつて来たばかりのやうな軍艦、遠い雪山がやぐ  
お召の赤い紙を手に草鞋のまま来てゐる

木村 縁 平

空が美しい雨のあとは月があげてゐる 麥の芽  
村が月夜となる 月が松の木の 上に出で 春  
降る日は早う暮れる家が 荻の穂、水も響れる  
人が鳴らして通る 菅戸の 鳴子月 になるらしく  
煙ののぼる 森をばなれて 鳥居のある 森が朝もやの 稲の穂  
さつきまで 後ろをきた人こゝろも 折れてしまひすきなばな  
マツチの 軸に燃えてゆく 火をゆずりあうてゐる

池原魚眠洞

いよいよ日本の子の 巨いなる 柿の木  
秀の 妙高見てかへる 蛙草 咲く 街  
ささや 獲り 秋の 古間の 山の 一つきり  
罵る 聲 消ゆ 煤煙の 中 雪 おもふ  
人の 一つの 南瓜 人の 探る 風の日  
朝な夕な 黙々 太鼓を 叩いてゐる 霜

稻垣 一 鳴

淡路 呼 潮

淡路 呼 潮

大根の太いの細いの山内ちかごろ大いに無事也  
子の忌日に花を探して歩く公園枯草  
お前の塔婆をお前の父が書いてゐる山茶花  
五ツの幼な顔が落葉焼く煙の中に、赤い仁王門  
溝一とすぢ霜いちめん家の者起きそるひ  
薪木割り藁灰つくりそなえるに冬に  
初冬の空で地で葱ま青くて立ち  
耕しもひとり茶の花のひるとなる  
茶の花に起きると通つてゆく一番列車  
蕎麥には茶うけが過ぎし夕この家の時雨  
去年は凍て草のみなし汁にも祈りつづけたり  
霜牙える空桃のすぢ枝の枯葉残し  
水霜の木賊叢半日の陽あたりみどり  
柿しぐれよう風のある家海は眞白ろ  
おとうさんだよ尻こみせず抱いてお貰ひ蜜柑色づく  
まま焚くかかさんは死んだ藪ざし蝨いらぬ  
筑波の山みゆる枯木の梢とほくそこに友  
さきに芽吹いた樺か、黄ばみ吾が家に戻つてゐる  
石のてるほど降つて逢ひに行くそばの花  
冬の日幼児らに一つの机あり塗机  
茄子の木掘りこかし鋤きかへし姉弟  
深い泥溝に下りてすぐ泳ぐかまきり  
こゝより稻刈り入る人ら畔の木小桑  
稻刈りもどりの柱に少しを掛け嫁  
三十五歳にして次女も逝く

森 林 五

關口比呂志

南 畝 三 坡

渡 邊 如 廣

細 谷 不 匂

この時雲の明りに散る銀杏葉  
 山を出でず山水流れ来る冬菜鳥  
 餘生遂に山をいでず落葉渦巻くゆゑに  
 ひさしに散る霞を見る青空ながら  
 やむなく機会に着くごとし冬日さす機合  
 野武士くるやうざんぐり栗の木の芽  
 砂丘に月見草芽ぐみ海動かない  
 竹林くらく筍搦つてゐる小さい男  
 春日くれる鍬を洗ひ顔を洗ひ  
 苗店人押合ふてゐる茄子苗くきの紫  
 草枯れてゐるみちにて街に買物をゆく女に會ひたり  
 これを秋日の晝のよるこび大き一つの机  
 このあたりの刈田子とゆくにおのづから並び  
 外套着て帽子目深くかむりし青年だ朝の雲  
 庭さき少し空地あり女は菊を折らむとす  
 勤務つゞく八つ手冬が近づく  
 みづしも木の根方いくあさ  
 柄の實を拾ふもう一つ手に  
 樹のまはり冷ゆるいろにわが立つ  
 いはるゝまゝに小豆を引き束れる  
 風うけ掌にとりて鹽揉みに南瓜の雄花  
 栗畑空氣すみたくさんな案山子を立てる  
 夜祭の灯に照り出されみちの小石  
 柿剥かず分けて食ふ山に芒のひかり  
 はつきり吾を意識吾がまへに木の實落つるに

安齋櫻礫子

松宮寒骨

福島一思

吉原東畝

小林満巨斗

淺野麗木

木の實ひろひ拾ふことやめて仕舞ひし子供  
 この沼のみづ銚び沼のうへ木々もみづるに  
 落葉ふみ山に入らん思念やみがたし或る時  
 みくににと生きる南瓜をたべる  
 ととも秋草になり阿爺の聲  
 ととも霧ながれるどこでもあるく  
 夜明けさう網下さう霧ふかくて  
 黍の穂が鳴るわがあゆむゆくてほのかに  
 けむりたのしく高い黍の穂傾き  
 子供穂草を踏みゆけり日うすくさし  
 負はれゆく兎の足のよこれある芋畑みち  
 うすいもみちの木山にして人のもつ刃物  
 かりんの木實あり今ふる雨やまず  
 秋の日風あるそんなとき豚のその顔  
 秋意一夕この泉石が韻  
 大根太いのを持ち論客のひとり来る  
 菊匂ふ甘藷を一食す日々  
 爐ひとつあり爐釣の古びこのましくこの人  
 胡桃が固し妻がこれを割る爐の邊  
 吾子の丈こゝより國史新しき秋  
 山いくつ野いくつを拓く銀河の眞下  
 二十日お盆草が丈となる  
 いちにちうらじるとあり國の空を見る  
 われらげふ日てり稻架方々に  
 朝なしゆんきくのうへの落葉拾ひすつる

池田亜杜子

佐々木四雨樓

林鷺水城

守矢自由也

三國屋白省

石原蘇來

本堂屋根大きく銀杏は銀杏で落葉する  
 霧がうごいてゐるなかのしみづる銀杏  
 家ありて灯し家のうしろの藪と秋來る  
 風が出てきた穂草と穂草うごいて冷えて  
 袋に拾ひ溜めてきた木の實が固い我家  
 夜霧吾らをつむ水の流るゝ音と  
 黄菊咲く家の前聲かけて過ぎる  
 空に鳥のこゑあり杜の稍黄葉する  
 晴れて木の葉とべり畑のうす紅い小菊  
 無音山の杉林徑が一方へひややかに  
 水はながれ流れる鳴子をひく  
 偶々露草のふかさ家から遠い  
 山の高さを云ふ街はづれ秋空  
 野分河向ふへ人々の急ぎ土乾く  
 もつべなぬぐまだ誰にも言はず  
 草の實こぼれ家かな  
 串をぬく鯨口あいて  
 かさね着せし歩いて來た  
 山羊にしぐさなくゆふがたの草の冷え  
 ひとのせはしさを地に秋雨の草  
 のわきの草原なれば蓼の花赤くさき  
 稲田にやうづもりて寺院の裏門  
 山に雪ある山に向ひゆく人のすがた  
 山は夕靄たち鶏遠く出でて白く  
 朝風吹く手に握つて子の青いりんご

松宮 磨 研

中村 亂 水

堀川 厩 人

木内 柳 陀

長谷川 杉 郎

今川 溪 花

放牧の仔馬一匹畑にきてなり月夜  
 雨降る熱れ柿に降る屏外を通り  
 霧朝ひとりのみの周圍の道  
 諸やく爐によりて狗を愛す子供  
 生姜を掘り餘生知つて居る人  
 今を日の照り田の稻見えない出水  
 粟をこなす粟の埃うすく立つよ  
 机邊秋の影うごきことに水滴がひとつ  
 小鳥を食うべこのこゝろにて見る湖とわが家  
 町の家は低くあかりなく月いで  
 はざの稻道をふさぐやう今日雲ひく  
 霜の麥畑へいま仕事につく陽がさしてくる  
 わが家にわがばたけの一畝はにんじん  
 故郷くさはらくさもみちにいのり  
 或は車前草も摘んだらしいこゝら松落葉  
 別るるともかうも矢はぎの橋を渡りきるとこ  
 木の實の落つる音が月夜にしてゐる  
 月のひかりがそのまま死れるのか山の障子  
 ともししして 秋、の 山  
 火けし壺の蓋はしめてある冬となる  
 風にとられさうなごまのたれをまく  
 今年も出てゐて祭が夜になる金魚やの金魚  
 月夜のこの邊に工場が建つさうな桑畑の桑の木  
 空へむすこさんささげた植木屋さんが高い木に、春の雲  
 道、十三夜の月が伊良湖へ十三里といふ

蓬萊 鶯 郎

山田 蒲 公 英

牧田 雨 煙 樹

石田 鳴 子

佐藤 豁 山人

中島 せい 作

鈴木 折 嶺

ウーブが女のせて通り松の並木落葉する木は散る  
みんなおんなじこと考へて日南煙管の火もらうてある  
不作とても饑えることはあるまい空からふる葉

集山 鳴雨

母の米とぐすがたを見るもひさしぶりて赤城も、もう初冬  
雨がちよつと夕やけして傘らしく學校農園の白菜の青い葉  
青い雨になつてきて夕ぐれ湯ぶれのあふれてゐる

原 農平

夕ぐれ遠くにわが家は見えて壽命の花咲く  
山の湯と野の花のしたしものなど秋、足れりとす  
月がはつきり冬になる塀のそと通る

鈴木 蜻郎

警報ではないサイレンが正午をつげるので稻刈日和  
雲を抜けた月木犀の匂ふこと言ふて連れ立つ  
子どもどつてゐる障子のうち、灯ともしころ  
くもと枯木と、手帳の鉛筆はいつもとがらしておく

月があつて柿の木うちの裏はたけ  
松山雪消えて松に陽のてる松山の松

原 蝦煎子

田の水のふえて雨、雨の一夜があけてゐる  
秋の陽のくれ易し寺の灯佛の前ともつてゐる  
火が燃えてくれる道端その家の人にも言ふてすぐ

粟島學校が島の中そるそるみのり  
灯ともし頃は番臺に女が、湯のまち螢

小川 都影

螢を手にして來られ初對面の挨拶する(湧泉氏に)  
こども手をうち雀を追ふ山村はゆたかにみのり  
おれは毒これは薬になる草の、秋さいてゐる草も

朝が雨になつた昔の芋の葉泊められて畑が少し(龍洞)  
少しは起きられてとしより黄菊に日の暖かさ蜂

東松 八洲雄

秋は青空が透くガラス戸に貼つたハンケチ  
旗耳の旗がなくてうちの大根島の、どこも霜

山形縣の父の故里に行く

植たたいて隣は掃屋うちの黄菊が晴れ  
山の日が昏れるに早くて夕餉の黄菊のおしだし

高い山の雲低い山の雲秋の色深まつて行く  
ポスト土で作つても膝でぬ戦であつた落葉する

杉田 作郎

柿も柿の葉も落ちて明るい月の世の中  
夜は月になる雲の竿になりかぎになつて來る  
戦禍のがれた垣に茶の花尋ねて行く

木戸 夢郎

だまされてゐたことはかり夕餉の雲消えるばかり  
日がふかくこゝまで射すやうになつて机の位置  
物を物に換へ芋の蔓陽に干したりしてゐる

長い夜である白墨のメモが消えかかつてゐる  
音は 藪を叩く 雨、秋

小谷 信夫

突いて秋の襖の、散つてさりげない枝が空  
朝、日がさすと鳥聲すると裏の崖の蘆紅葉する  
樹は伐つて木々紅葉なる山は尾花の白い骨れゆく

障子に日はあつて水音主は客に炭をつぐ  
干魚焼く匂ひして風が出た 晩

田中 井夢

月夜の月あかりしづかに機械が眠つてゐる  
道があるので木のなか風がゆくの

彼二君、以前南郷庵にありし頭を想ふ  
島はつきよの木槿のはなに灯してゐる君  
もくせい古いまちなみ家の裏までみえると青い海で

もいでうけてゐる手へいちじゆくのちちのたれるのを  
 雨風に散つていてふの葉の青い三角夏が逝く

堀 英之助

わらんべ蒲の穂持つに遠たづね子に逢ひにゆく  
 青いさかなが釣れる炎天の海しんかん

稲に花がついてゐる露いっばいに日がのぼり

しろいくすりをしろい紙へ薬局うちがわの看護婦さん

私をつめつんで自分のつめつんであるうぐひす

石段さくらのうえになる殿々のぼりて詣る

電話機野のさきへかかつて生きてあるといふ(東京震災)

ほのぼあさになるだんだんあさやけのやうなほのほ(富山震災)

稔り田見下ろして山のお墓のきいろな蝶々

財馬 阿歩

蓮田の蓮の枯れつくしたる朝の陽の中

おはば靱干し日和の垣のコスモス

笈の音もきのふけふと靱干し日和

月が雲にかくれたりして橋のこちらむかふも刈田

秋の日といふのはだんだん日がさがつて来てつるし柿

橋の手まへのところが木馬の道朝方月かけのしてゐる

井手 逸郎

づくしの柿のうまし山の方しばらく夕日

冬の朝の日さしてあるところにはとり小屋のにはとり

日のささずなつてから日のさしてゐる雑木の紅葉

菜が青々と冬陽に金庫はまだそのまゝ

花も並んで買ふ片側町の波が秋

擴大鏡が本の間に山の上に住んで居らるる秋  
 日だまりの洋傘繕しやさんに遠い海がちよつびり

淨心寺 惇

ゴム紐買ふて木の葉の様な釣鐘を焼跡柳の木  
 地蔵さん茶賣の實を、いっも海見てござる

井上 一 二

アメリカ兵と通譯とは見えて白浪秋を乗りゆく  
 夕日おほらかにこれが君の戦災菜園

秋の雲かなあちこちに白亜すべて焼跡

子供番に子供かついで遊ぶ冬の日ばよし

くちなしのはな母と娘きりの夕べで

今宵ばかりとなつた秋の一つの灯を消す(朝鮮を去る)

日本が見えて来はつきり見えて来て秋

よい時に墓になつて小春の海が見えるところ

月の海たぶたぶと鳴りお十夜詣り

池田 詩外樓

にはとり、小さな柿の木が葉を落す庭はある

行露居伸秋小宴

月へ秋牌を無造作に床に、障子開けてある

ながれの音も、葉附の柿を盆に月を待つ間

驛へこちらに旅館が桑など干してなにこともない

精米所の隣り醫院の木犀がひっそりと秋だ

それは忘れようふるさとばはねつるべが水吸んである

雨あがると水にうつる木や家が障子しめてうつり

二階から七輪で焚いて隣りの藁の木夜になる

三日月空のすみっこにある冬の山の半分が杉ばやし

秋深く山を掘りふかくふかく両手もて掘りこれが山のいも

枯山がゆくゆく窓まで子供がかへつてからの先生  
 水の光りに海老の一尾ならず冬深しと思ふ  
 ふゆふかくみづのわいてあるところ海老の觸角

和田 光利

三好 叢 一路

米兵梨をむいてゐる途かの出羽丘陵が雪  
甘藷の蔓の伸びてゆくことを民主主義といふことを  
死なせてはならないと思ふ月の屋根のぬれさま  
生徒らシヤベル擔いでかへる雪の山々の一角へ夕日さしてゐる風景

金井三良

雲が動いて月光するどく雪山の家の前杉の木  
空に材が二三本の吹雪止むとしてふく  
夫婦くらく稻負うて来て今ごろの螢か  
先生手術着で診察室秋陽いつぱいまつてゐる  
ふるさと冬の山天女簪を吹くといったやうな雲が流れてゐる

石田白毫子

舟を橋にし雨洋戦災地で渡つてゆく秋  
駄々とトロッコ押してゐる枯れてゐる

霜月深い空の色も鎌倉の二三人づつ登つてゆく石段  
寝ても蠅叩きその潔癖が病後の秋日

岡木六食子

原野の井出原野に相貌あり灌木のかたい實  
集る児童いたはし日焦けて膚あれて終戦を泣く  
陽よりの窓は枯葉のゆれて影がある

中村倉次

玉れぎの苗小さくも芽の青々し冬日  
駄々秋涼の灯のはなやぎ入る鎌倉村  
野火上の出水が敵浸す胡麻の花咲く畑

小川一灯

夕顔のまがきを過ぎて四五戸が灯つてゐる  
ここにも疎開の母子がゐて灯る籠棚がのぞけ

福島農夫男

新しく世を開く土のしめり秋中は  
寒椿の花庭の明るさになつてゐて晝  
霧のぼうつとした日があり四十雀と私

鈴木梅字人

障子をあけると湖一枚の青空

今日も吹く風兒童の群れ一列靡もなし  
列車山を出ると山裾の雪落葉松  
落ちる葉もない柳となつて夕べの道  
明るく灯ともし日本を考へてしまふ

伊藤柳江

山のあなたに沈む日この道をゆく  
花にも落日おち葉を焚くひとり  
日の明るさに牛も居れば稻穂に風のふくさま  
町のせまさは暮れし雨の牛のしのし通る  
けさつめたい風のほすれん草ぬいてきて  
背中まるう消炭吹いてゐる寒燈

鎌倉白羊城

薄あるところとないところの堤があめ  
これで冬を越すそこばくの吊り菜窓を塞ぎ  
菊もつてきた見舞人の暖かい外套

佐藤鳴風子

秋のあさひ少年水をのむ山かひの町墳井  
くるみ落葉して落葉する井の水を汲み  
遠く霞む秩父連山動かぬ秋空  
日の丸ここにもなくて秋陽神域にこもらぬ

藤田三六亭

撰り食ひす語の秋もをばりの雨  
れんころにもてなし春炬燵みかんどつきり  
乞食に顔をむけてゆく冬の人のえりまき

松尾十樹

冬木のすがた星が一つ二つ家族家に揃ふ  
遠山も秋のてふてふと歩るく  
雨寒い朝のきて蔬菜汁にこと足り

泉大畹

好いことのある街の果の山から夕映え  
たまさかの客に謔ふかす互に瘦せた笑

横關碧樓

安田菟晴  
奥村四秋人

土さらさら麥にかける手に蜻蛉とまらうとする  
軒のもろこし鼠がこぼす音のみの夕富士  
互に眼のかすむを語る秋燈ひいやり浴び  
なげやりの菊花見せてあるにかがむゆとりが出来た

朝倉九鴉子

焼かれればぞ捨鉢や今日小菊四五輪  
ぬるで紅葉ばし向つ峽家は暮れ残りつる  
来れば此の座のあえくば小春けふ百ヶ日  
遅し藟葉柿又たわな椽鼻ここに  
きのふ又けふよき小春日ぞ展墓果せける  
夏祭ゆふべくる音からの心持

相澤華芳

沖へ沖へ夏の夜明けの鯛網へ  
しるくみちあれみづの水草のあをみどろ  
せんたいい郊外秋ゆふべ畑も  
朝のひよきがながれ草に草の實  
みちに出でこのみち行く外なし草枯れてをる  
子ども抱いて寝る冬の夜壁白し襖の白し  
どん栗を敷へたり疊にころがしたり子の云ふまゝに  
これ人の世の雨ふる草のうす紅葉  
ぬれながら小菊白ければ雨の目わが子とあそぶ  
泥芋を抜く踏み雨のあとの畠土

加々美青河

豆粉をひく白どつしりある夜のたゞみ  
薪を割るところ地につゞき水菜一畝  
笹草とうすいもみぢの木々の裏山日のひかり  
ゆくところく地の苔と竹柏は枯れず  
畑の草取る穂草穂を出し穂のこぼれる

長屋青橙

牛がある野菊に腹這ふた大きな一頭  
畫筆を執り稻田を前にし座を設く  
筆筒筆洗はれてあり紙展べてあり差挿してあり  
秋の日海の匂ひを家の壁みな白し  
終戦いつもの朝のいつもの水田の花  
蚊柱が立つてゐて無事のわが家わづかの白壁  
惨敗柿の實あななく柿の葉ひろく  
川べ一つの家わが家族ゐて夏の月あかり  
雨が降りつゞくある晩の菊陰一皿  
晴天きさゞげを起す實の重きなもき  
かほど杏の實垂れれ田草取の乗  
雨にぬれた道かたし早乙女ふんで行く  
田水深しと見て來客の前にすわり  
女茄子田に水ひく水音たかし朝風  
炎天地に風なし甘藷畑がつゞきその風情  
峰の一樹紅葉する一樹は幹曲りある  
街の夜をあるくおほかたば躰跡にて妻の頭巾  
炭竈煙が見える道を歩む我あり牛のあり  
時を定め馬の背を掃いてやる青柿百目柿  
風吹き松山松ほそくてきのこをあさり  
海青きが見え憩ひて高ききのこ山にをる  
稻にほふを來し山にふみ入りし山の夜  
積まるゝ鯖のいる漁夫つきつきに船を上り  
冬菜の畑大悲空の雲あかり  
池に小さい魚をり大き鯉一つをり冬來る

細木原青起

田中海灯

宮林釜村

若林乙吉

南晴星

高橋晚甘



冬朝かやうに池の鯉にある水嵩

うるしもみちのところ馬士が道に迷つて馬も道を知らない

茶の花がさき道まつすぐありまつすぐ行く

戦終り諏訪にも冬來るとおもふにかの人とかの人

千ぶり咲く山に來て人の匂ひさみしく

秋風吹いてゐるけふ休むである木白の木目

落し水落ちるやら闇値にくらし堪へがたし

きのはちるおとのこのみおつこちるおとのやまのおと

この頃の世の中のことがはつきりしてくる柳水に散る

柿が木に赤くて進駐軍ボケツトから煙草

山の道山の子が二人もみぢしてゐる

大樹くち倒れ夕月林の中

粟をとり入れて庭一ばいの月かけ

親の腰を踏む子柿が吊してある

秋が東京のどこの空にも富士がある省線電車

吹いて吹いて降つて降つてけさの木の子

いろいろの花が咲いて家の裏嵐になつてゐる

僧は衣の袖人は羽織のたもと秋風が石段上ると下りると

蟲があし一本おいていつた灯とひとりがすこし所在ない

この瘦せやうは疎開のあこ我が許に戻つてゐる

疾風吹く青空のやせんぼ我子

氣なくばることの多くなつて朝晩育たない秋茄子

罹災この方村の道行く雨の曼珠沙華

寝て寝つかれない颯風の夜の枕をはづす

鈴木あつみ

内島北琅

伊東俊二

内田南輝

喜谷六花

草の種兒童二人來る三人來る

柿食ふてあり斷崖深いところ舟下る

野菊咲く雲のない大きな空である

身に親しけれ袖もの秋袷着し肩をゆする

信濃桔梗が原にて

山は新雪けさからまつ林落葉ふみゆく

百瀬葡萄園主を訪ふ

ぶだう枯木ばたけの一軒二軒の尋ぬる一軒

洗馬に義仲の古蹟あり

洗馬の清水は青菜洗うてゐる莖白き菜を

信齋といふ陶工の遺跡あり

信齋窯跡は柿の落葉、家があると木末の柿

宗賀村長瀬方にて

軒下胡麻も十日ン夜すぎの月の明るく

冬朝薪を焚く薪の匂ひこの日を佳くす

或家に八つ手花咲くなど道を歩くことの幸

海の底をあるくやうに初冬の夜を行く街中

母に逢はず母死にしより霜の幾朝

われを愧ぢてゐる枯草など焚火してゐる

伊藤柳江君へ

伊那の水霜深し思ひて雑魚の中の小さき鯰

届いてきた雑魚の一匹一匹ならべし子供顔

蜜蜂のきなる朝早い陽にまだ堅い菊

警報に似てボーを鳴らす晝時萩が枯れがれな

萩原井泉水

中塚一碧樓

西垣出禪子

## 新連句提唱

荻原井泉 水

大正の初年、今から三十五年の昔、私は「新しい俳句」の興られねばならぬことを提唱した。今、私はここに「新しい連句」の世界が開かれねばならぬことを提唱する。

此の三十五年の年代は決していたづらに過ぎたものではない。大正の初年は「新傾向俳句」といふ名のあつた時代である。私は、新傾向俳句の行きづまりを指摘してもつと自由なる句作態度を要望したのだ。その頃にはまだ「自由律俳句」といふ名稱はなかつたが、私は

我々の自由なる心を押し擴げよ、其に依つて俳句の自由なる形を生ひ立たせよ

と叫んだ。俳句に「自由」を要求した言葉として最初のものだと思ふ。「昇る目を待つ間」と題して「層雲」大正二年一月號に掲載したものだ。これに依つて、後に「自由律俳句」といふ名稱が生れた。さうして、俳壇一般からは、異端邪道視せられつづけてきたが、とにかく現今の俳句界に「自由律俳句」なるものが儼として存在することは一般に認められてゐる今日である。又、われ／＼として、層雲句集も既に二十巻になんなんとし、一應は自由律俳句としての業績を貽し得たと信ずる今日である。その今日の状態をかちえたとはいふ事實と信念との上に立てばこそ、私はここに「新しき連句」の提唱をはじめたいのである。

端的に云へば、新しき連句の提唱は、自由律俳句の……といふより、

自由律俳句の人の氣持と態度とを、もう一次元上へあげて自由にする、といふことである。それは自由律だ々々と自由律にしがみついて他を全く顧みないことは自由の行き方ではないといふ、アイロニカルな眞實を知らねばならないからである。だが、こゝが自由律人自身には一寸解りにくいところかもしれない。で、こゝが解り難いやうならば、自由律俳句と新連句と全く別々のものと考へてくれても大して差支へばない。自由律俳句は自由律俳句として精進すると共に、新連句は新連句として樂しむといふ氣持と態度にしても差支ないのである。

自由律俳句の道は、俳句といふ藝術の道ではあるが、ひたすら自己と自然の中に沈潜して己れの魂を磨かうといふ氣持は、むしろ一種の宗教に近い。それはそれでよるしい。だが、藝術としてはそれは狭すぎる。俳句が詩であるならば、もつと廣い視野と創作のスピイルラウム(空間)があつて然るべきものである。

自由律俳句を引力の求心的なるものとするならば、新連句は引力の遠心的なるものである。此の二つの反對なる力が適當に交流し影響しあふことに依つて、組織ある運行がはじめて可能なのである。われ／＼は今まで、その一方にのみ専心してきた。専心したればこそ、業績を擧げえたのであるが、今や、視野をもつと廣く、心持をいつさう和やかに、態度をずつと自由に構へて、全般的なる俳句の世界を經理して行くべきものだと考へる。

詩は記實ではない。詩は創作である。——此の「詩は……」は「俳句は」——と云ひかへても宜しい。俳句は記實ではない。創作である。——といふ

論點から見れば、われ／＼の俳句はあまりにも窮屈であり、不自由であるとは云へないだらうか。われ／＼の俳句はあまりにも記實にとらはれてゐる。あまりにも寫生を法としすぎてゐる。思ひきり自分の身のまばりを離れて、人生社會の眞實を尋ねべきではないか。目や耳にのみたよらずに、魂を以て見、魂を以て知る世界を見出すべきではないか。――一應は斯ういふ説もたしかに成立しよう――われ／＼の俳句は要するに「自個俳句」である。イヒ・ホエジイである。それが悪いのではないが、それだけでは、行き詰つてしまふより他はなからう。時としては此の自分の家から飛出して、もつとひろ／＼とした世間の、世界のあることを知らなくてはなるまい――一應は斯ういふ説も成立しよう。

小説だとして、イヒ・ローマンばかりでは仕方がない。イヒ・ローマンに藝術的な作品のあることは云ふまでもないが、イヒ・ローマンしか書けない小説家では情けない。小説とは創作である。作者が自分を離れて、生きた人間を創作し、生きた世界を作り出して行くことにこそ藝術する心がある。俳句でも、同じ譯ではないか――一應は斯ういふ説も成立しよう――。

だが、そこに微妙なところがある。俳句といふものの歴史的發展の跡をたづねる必要もあるし、理論と實作との喰ひ違ひを正すことの必要もある。そこで、一またぎに此の問題の結論を云へば、それは私の持論でもあるが、俳句といふものは何處までも實感に終始すべきものである。だが、俳句よりも一づ俳諧の世界、即ち連句に於ては、空想に依る創作で行くべきものだ。此の點に於て、俳句と連句とは車の兩輪の如し、と云つてもいい。一方に俳句あつて己れの内に潜み、一方に連句あつて廣

く世界に心を遊ばすといふ譯である。然るに、これまで、われ／＼は俳句一方のみを押してきた。今、それはそれとして、他方に連句の世界の扉を開くべきだと云ふのである。私の云ふ新しい連句はそれである。

此の觀點から芭蕉に歸る、さうして芭蕉から再出發するといふことも間違のない道である。

芭蕉の俳句(正しく云へば、芭蕉の「發句」は概ね自己俳句である。己れの實感の他に出てゐないのである。

酒のめばいと寝られぬ夜の雪

山路來て何やらゆかしすみれ草

うき我をさびしがらせよ閑古鳥

秋ふかし隣は何をする人ぞ

これが發句の本格である。さうして、俳句を以て人間を練磨する道、即ち、芭蕉の道としては、どこまでも爰に潜心の魂を据ゑなければならぬ。

其と共に芭蕉は連句(芭蕉時代の所謂「俳諧」)の世界をもつてゐたのである。

方々に十夜の内の鐘の音

相の木高く月冴ゆるなり

門しめてだまつて寝たる面白さ

拾うた金で表がへする

宵のうちばら／＼とせし月の雲

藪越し話す秋のさびしき

芭蕉

野坡

芭蕉

野坡

芭蕉

野坡

お頭へ菊もらはるゝ迷惑さ。

娘をかたう人にあはせぬ

野 坡  
芭 蕉

これが連句の境地である。發句が大地に根をおろしたる確かさとすれば、連句は自由自在に大空を翔けめぐる詩の翼である。ここにこそ藝術の洗練性があり、又、作者としての苦心にむくひらるゝ會心の快さがある。

## 作句餘談

井 手 逸 郎

### 悪い俳句

作家の立場からふりかへつてみて、ここ一二年はしばらく問題外として、凡そ十年程といふもの、随分あふり波を食つて苦しく喘ぐやうに泳いでゐた時代であつたやうに思はれる。自分は自由律は、唐突なたとへであるが、遠泳であると心得てゐる。少なくとも自分は遠泳の心得をもつて泳いできた。けれどもここ十五六年の間、シュトルムウントドラングの時代、仆れかかつてくる波浪のために随分苦しむてきたことは事實である。

プロレタリア俳句といふものがあつて、自分らのピッチを亂した。プロレ俳句は大層急ピッチであつた。さうしてまた急ピッチであつただけ短距離に終つた。若しあれらの俳句が短距離に終らず、したがつてまた

急ピッチ泳法をとらなかつたとするならば、事情はよほど變つてゐたであらう。定型新興俳句の場合と同様である。新興俳句がプロ俳句と苟合して、そして最も短い期間にその姿をかくしたといふことは、つまるところは泳法の問題に歸着すると考へる。結局急ぎ過ぎた。

「定型自由律のもつとも根本にある問題を解決せずして、プロ俳句と新興定型とが苟合したといふ事實は、あれらの人に遠泳の泳法が判つてゐなかつたといふの外はない。

自分たちは長い苦しいこれらのシュトルムウントドラングの時代に、一人の大いなる先達の姿を波間に見失つた。河東碧梧桐である。碧梧桐の死はさびしかつた。碧梧桐の全詩品を凡ての角度から検討することが出来なかつたそれほど、自分らは苦しく喘ぐやうな波濤の中にあつた。その時分から定型の敗勢がはつきり意識され始めた。碧梧桐存命中「定型自由律」は泳法の問題に於て突き合つてゐた。けれどもこのころからして、ユニホームが問題になり出した。自分は泳法といふことに、確信をもつてゐたのだが、それでも軍官の壓力を背景として、自由律の自由といふ言葉に神経がつかはれたるときには、悪い俳句の跳梁に自分はいそががつきた。よくもあの頃の官權統制の下で、自由律は堪へてきたと思ふ。戦争といふものが、凡てのものをレナメンテーションの呪の中で身うごき出来ないものにし、半封建的なものが羽ぶりを切らした。

「自由律はとうとう「内容律」といふ言葉に、さらに「俳句日本」にまで、言葉の上だけで後退しなげればならなかつた。文學報國會が決戦のため俳句を道具にしてゐた。それはよろしい。自分は心の中では自由律といふ言葉を放棄しないつもりであり、また言葉の上でも決して放棄しなかつた。悪い俳句といふものは、詩の本質からはみ出して、さうしてつまらないものと結托して悪いことをする。總じてこれらの悪い俳句は、

遠泳の心組を忘れた泳法の俳句である。

## よい俳句

俳句が「本来あるべき姿のもの」はよい。悪い俳句の例を一つ以上あげることは自分には出来ない。碧梧桐の三千里、一碧樓の試作、層雲の發刊……よい俳句の生れ出るときの苦しかったことを想ひおこしてみる。

新時代がよい俳句を作り出したとはいへる。新傾向調、碧梧桐調、海紅調、層雲調……よい俳句は遠泳の泳法の下に、ゆつくりと新しき日の創造をはじめた。そしてそれはホンモノになつた。それ故に、自由律はもう金剛不壞であつた。自由律非俳句といふことをあげつらつても、よい俳句には反應はない。さうして益々ホンモノになりつつある。あるべき俳句の本當の姿は自由律であるといふのが自分の作家的確信である。

あるべき姿が五七五に歸着するといふことは考へられない。作家的な舌頭千轉が定型をマスターして自由律に事實上なつてしまふといふことは考へられる。芭蕉の俳句こそ自由律的定型俳句である。五七五といふものが、本来作家の體驗の中に「與へられたるもの」としてある筈はない。

五七五が舌頭千轉の間に、自由律になり切るところまでゆくべきである。自分はこのころおぼろに、詩的イマーシユといふものに味到してきてた。舌頭千轉してこのイマーシユを追ふのだ。五七五は舌頭千轉のワクではない。五七五は一つの指向である。自由律もまた一つの指向である。舌頭千轉のいとなみの中には、たとへおぼろに五七五のワクが意識されてあつても、それは最早定型ではない。舌頭千轉によつて五七五は解體され、こなごなになり、再び組成される。組成されたものは成果として五七五であつても、内實は自由律だ。指向としての自由律も定律もそれは本来舌頭千轉の一つの假幻のワクではあるまいか。まぼろしのわ

くに幻惑されることはない。五七五が自由律が「俳句の成果」の中にあるといふことはそれほど重要ではあるまい。俳句は本来一句一律であり、さうして俳句の律をもつてゐなければならぬことは定則である。俳句の律による一句一律であるところのものは自由律であるけれども、自分らをもしも、指向としての自由律、定型といふことを考へるならば、その思考の中には既に「人間の體臭」があるといはねばならぬ。この人間の體臭」は人間の自由主義者、半封建主義者といふ二つの型をま裸にする。

## 新人はかうした意味で新俳句を作つて下さいと私は云ふ

西垣 中禪子

今年自由律俳句の隆盛を見るものと私は思つてゐる。近頃本誌へ定型の人の投稿が増したこともその一つの現れと云へる。「定型の人」と云つては正しくないかも知れないが、初心者には定型のほか作れないからこの意味で新人と呼んだほうがびつたりすると思ふ。

新人は定型俳句のほか作れない——と斷言しては體當を缺くかも知れないが、作り易いからであらうと思はれる。ところで、本誌への投稿は定型俳句では困るのである。定型俳句とは封建的な考から出發し、それを一般に強要する俳句運動だからである。即ち、何年たつても十七字と去ふイデオロギーを大衆に強要する。いくら作句内省——無意識行爲で

ない限の作句行爲——の批判に立つてもこの封建的精神から解放しよう  
としないものだ。

本誌へ投稿の定型作品は、作者が俳句内省に立つかきり、既に態度に  
於て定型ではないと云へる。本誌へ堂々と定型で投稿すること自體が最  
早自由律精神と云へるからである。

十七字が定型か——この言葉は正しくないであらう。十七字に限定す  
る精神がいけないので、十七字になつたことを否定する意味ではないの  
である。俳句する技術、一句に纏める場合、皆一律に十七字或は五・七・  
五音調に纏めることが不自然と云ふもので、作品が一つの型で出来るこ  
とは、既に藝術とは云へないものである。十七字定型俳句作品と十七字  
になつた自由律俳句作品とは態度に於てこれだけの相違はある可きであ  
らう。

自由律俳句は長いからきらひだ、あれは俳句ではない、と云ふ人があ  
る。長いのは長いだけの必然な「俳句律」に依つてあるからで、これは十  
七字になんでも限定しようとする封建的精神を破る藝術意識に出發して  
ある。長いと云ふことが「よい」ことではない。又、短い程よいと云ふも  
のではない。俳句の短詩性と「完體」と云ふこととあつて、「具體的小」  
と云ふ文學の俳句性を云ふのである。十七字を中心に前後の字餘りを許  
すと云ふ俳句運動の問題ではないのである。それは俳句の本質問題であ  
る。

願れば、昔定型俳句陣から生れた新興俳句はどこへ行つてしまつたの  
だらうか。その人達は今日でもやつぱり定型觀念論に復員するのだらう  
か。當時の新興俳句人は、勢くとも當時の自由人であつた筈だ。たしか

に定型の約束は大家をつかむによるしいが、大家化の眞の意味を知るも  
のとは云へまい。藝術性が約束によつて失はれると云ふことは、形式の  
マンネリズムに依るからで、この形式化を定型のよさと自負するやうで  
はお話にならない。

新興俳句人が「定型擴充」を取上げ、十七字定型を破らんとする自覺に  
ありながら、なほ自由律俳句ではないとしたのは、新興俳句運動の目的  
が何處にあつたかを疑はしめるものだ。詩論から云つても、定型擴充が  
「表現の自由は音律の自由性から」としたのは、昔の自由律俳句が「音律  
に詩の價値がある」と盲信したのと同じで、五・七・五と云ふ調子は解放  
さる可きであつたであらう。

音楽への憶が俳句の本質でないことは、最早今日では自明なことであ  
る。私は現代俳句を自由律俳句と稱しても、昔の自由律俳句へ逆戻はさ  
せたくないのである。歴史は水の流れる如く一方的に必ず前進するとは  
限るまい。前進してあると思はれる流が、後退してあることもあり得る  
であらう。だからこそ破る藝術の精神が必要であつて、それは反省する  
と云ふ自意識の強化である。現代俳句(新俳句)は定型・自由律を越える  
新たな自由律俳句、單に定型に對する自由律陣の俳句と云ふ非定型俳句  
ではないと思ふ。私はこの意味で、定型の新人を歓迎したい。

なんと云つても、現代俳句は國民大衆の俳句を強化するものでなければ  
ならない。即ち、定型に對する自由律といふ俳壇文學に限られたものでは  
なく、社會全體を意識せる文學の建設といふことこそその基盤である  
と思ふ。國民と共にある文學、國民の思想、感情が表現されてある俳  
句(藝術)と云ふことが忘れられてはならぬと思ふ。

だが然し、今日國民大衆が有力なる讀者、作者として登場して來たか

らと云つて、或る思想運動の爲に國民大衆の中へ俳句(文學)を持込まうとする意圖ではない。詩や俳句は、時代の所産と云はれる如く、時代を正確に認識することが必要な條件であるからである。それなくしては民族詩たる俳句藝術の意義を失ふものだ。「よい」と云ふことも時代と無關係ではあり得ないし、作家の時代に於ける認識の深いか浅いかに、價値の根源はあるのである。かういふと、詩の價値は内容だけにあるのかと思はれさうだが、何々精神を俳句と云ふ形態を借りて表現する、さういふ二元論の俳句論に立つものではない。我々の新俳句は反省の統一によつて如何に表現するかの藝術性を實現と見る、即ち技術として、一元論を構成するものである。

現代新俳句(自由律俳句)は大衆性を保全しつつ、藝術性を生かすところの行爲的俳句の建設である。人間行爲の根本たる自由な意志、詩論で云へば、意識的意識を持つてする詩行爲、それは俳句する心の根源であり、認識がエッセイによる生命の實現である。

新人はこの意味を理解して、定型に頼らうとしないで、自由人の自覺から先づ「壺」を破つてもらはねばならないのである。

## 指針を記す(二)

中塚 一碧樓

罹災の人からすでに秋の繪と文きたり

富岡 敏

戦災によつて打ちのめされた人々が、段々とかうした平靜を取戻し、かうした明朗を持つて来る事は實に喜ばしい。この友は早くも秋の繪を

描き、さうして一文さへ書き添へて消息して来てくれたのであった。罹災の友が繪を描くやうな氣持をとりもどしてくれ、文をもするやうな落ちつきを持つてくれた事は如何にも欣快であり、新しい建設への發足が感じられて心頼もしく思はれるのである。

「秋の繪」といふので何となくあかるい思ひがするし、それに「文」といふのも簡潔に實によく云はれてゐる。たゞに消息といふでなく自ら一文を作してゐるやうな場合であらう事が思はれる。さうして作者のおもひは「すでに」といふ言葉に據つて鮮やかに表現され、深い味はひを持つてゐると思はれる。

こゝろどよめき炎天の鹽はまを稼ぐ 富岡 敏

照りつける鹽濱の土の匂ひ、鹽の匂ひ、さうした勢が顔を打つて来るやうな場合がよく表はれてゐる。この心持を表現するに作者は「こゝろどよめき」と云つてゐる。「こゝろどよめき」とは實に思ひ切つてものが言へてをり、この腹の底からの言葉に敬服する。

評者は鹽をつくる家に生れ、鹽濱の中に育つたやうなものであるが、此一句を見て、懐しくも、生き／＼と炎天の鹽濱を自分の五體に感じ、喜びを持つのである。「こゝろどよめき」といふ作者の思ひと、そのすぐれた表現はまことに感嘆に値すると思ふものである。少々わたくしごとを述べたやうであるが敢て之を附記する。

木槿に近寄り木槿の花見てゐる人 中村 亂水

一句の表はすかたは何でもないやうであるが、一句の持つ思ひはなかなか味はひ深いものであつて、このしづかさこそ、人として失ひたくない境であると思はれる。

新しくもないが、古くもない心持であり、古くはならない心持であるとも云へよう。

或る一夜を眠る蚕は繭をつくる音 泉 大 畹  
蚕室のものしづかさ、蚕室のもの匂ひ、さうした中に一夜をねむるのである。蚕が繭をつくる音こそ、いみじくも身に添ふて喜ばしくひいてくるのである。

此場合「或る一夜」と云つた表現は恰もよく、如何にも本當にものを云つてあると思はれる。この一夜が佳き日に明ける事は無論であらうと思はれる。

男炭竈に火を入れ朝は山影 中川 尙 三  
地味であるが情のすぐれた句である。

一句端的ではあるが「朝は山影」といふ思ひはまことに素直であり、さうしてそれは一つのいふ情景でもある。それによつて、炭竈へ火を入れる男のしづかりとした心持さへも感じられるやうである。

繰り返して云ふ事であるが、一句は必ずしも珍しい景、珍しいものを表はさなくてもいふ、一句の心持が勝れたものであり、心持が澄切つたものであればいふと思ふのである。

遠山もあめになる柿の木としづく

秋山秋紅蓼

このしづかな心持に賛成する。

「遠山もあめになる」と徐るにものを言つて「柿の木としづく」と如何にも確かりと象を描いてある此手法、至つて鮮かであり、作者の練達を思はしめるやうである。感吟。

水を貰ふ赤まんまの塀にそふていくたびとなく 佐藤鳴風子  
穩かな、のび／＼とした心持が巧みに表現されてゐる。それがどうした場合であらうか、どうした事は問題ではない。水を貰ふ事によろしく、いくたびとなく水を貰ふ心持で、それで充分である。「塀にそふて」と表はした事が赤まんまの在り方を確かにし、それを自然にする働きをなしてゐてそれも結構である。  
貰ふものが「水」である事むろんよらしい。

## 新しき自由の詩

山田 宗 作

かなしきかな

大いなる聖斷。

いくさ終りて、

はらからの

はらからの泪はつきじ、

はらわたをしみ出づる

泪、泪、

きよらかな泪あふる。

新しき國の

はらから、

いき吞みて、



ほぞひきしめて、

新しきかどいでに立つ。

新しきわがかどいで、

この道は一つなるかな。

この道は新しきかな。

生誕なり。

出發なり。

新生なり。

自由なり。

うごくもの、

かすかにうごくもの、

新日本のかどいでなり。

新しき自由の詩は、

詩人は、

天地と共にあり。

天地と共に新生せり。

過去の目を盲ふ勿れ、

過去の日は駄す。

その古き詩の皮囊、

すみやかに捨つる日來たる。

すみやかに旗うち立てん、

自由の旗、

光の旗、

うたびとの旗、

新日本俳句の旗、

新自由律俳句の旗。

この道は一つ。

若き人々と共に、

新しき人々と共に、

歌々と

新しき國の詩、

新しき詩の道を、

廣り進めん。

### 句 評

南 晴星 石田白毫子

内田南卿

夜々繩なひ胡坐に層おかずわが初心者 園木六食子

【晴星】繩なひに馴れない眞面目な青年が夜々熱心に繩なひをする。この初心者に對する愛情が一句に表現されて心地よい句である。「わが」といふ言葉がよく情緒をあらはしてゐる。この句は楷書で書いた書を思はせる句である。角の取れない表現である。その點が却つていゝ。

「繩なふ」でなく、「繩なひ」と置いたこともこの句では適切と思ふ。  
 「わが初心者」は作者自分でなくて第三者である。

【南艸】 繩なひを習つてゐる人の句であらう。每晚、丹念に繩なひをしてゐる眞剣な有様が、「胡座に厚おがす」で、十分窺ひ知られるが、表現がぎこちなくて、語呂がわるい。「わが初心者」も、一見素朴で、面白い表現かも知れないが、どうも洗練が足りないやうに思ふ。もつとリズムカルな表現が欲しい。

落栗冷えてあり雲から来る小鳥 三雲城東

【晴星】 印象的な句で詩趣豊かな句である。殊に「雲からくる小鳥」と大膽にやつたのが成功してゐる。「冷えて」は情景をよくあらはしてゐるが、稍々過ぎたる感がある。

【白雲子】 つやくとした栗色の肌の落栗、しかも時雨に濡れた落葉の上にはつつりと置かれてある落栗、手に取れば冷えくとした感じが手に傳はる。秋の感觸だ。どんよりとした時雨の上つたばかりの雲から石のやうに落ちて来る鳥しかも小鳥、晩秋のわびしい情趣そのものだ。秋の空山にある淋しい作者の心持がこの情景をこの感觸をしつかりとつかんでの作品だ。

【南艸】 栗山の冷えくとした光景が、可成よく出てゐる。「雲から来る小鳥」はよいが、「落栗冷えてあり」は努力が定まらない。だが、かうした句は、我々がすでに、詠ひつくした過去の句であつて、この境地からもう一步前進されんことを望む。それから、これは作者各々の好みかも知れないが、僕は、この句の「雲から来る小鳥」を、「小鳥雲から来る」と言ひたい。

雀はとんで秋祭はをへて少年 山崎多加士

【晴星】 此句は拙居の句會での句であつた。その際の原因は「雀はとんでしまひ」とあつたが、先生の指摘で「しまひ」は「ない方がいいこと」に致し削られた。ない方が丁度の感である。「しまひ」は「言ふと行き過ぎ」である。無論とびまりの意に相違ない。この句では「は」の重なりもいし、「雀はとんで」が軽くて實にいふ。少年の物淋しさが出て居り少年への愛が裏に流れてゐる。一句あつさりした情趣に引き入れる。淡彩を施した素描の名品を見る感である。

【白雲子】 夢多き少年の日を憶ひ起させるやうな爽やかな句だ。雀と秋祭り了へた少年の感傷を題材に夢のやうな童話風の味を持つてゐる。いつも饒舌の雀も一羽ともなれば淋しい。待ちに待つた秋祭——それもすへて仕舞つた少年はつとした感じの一面何とはなしに心のうつろな心持を感じてゐる。もうちぎ山には雪も来るのだ。淋しい雀の飛ぶを見送つてゐる少年の瞳にも晩秋の淡い感傷がある。雀飛んで秋祭をへてこの感傷を疊み上げそれを打切るピリオッドのやうに少年と置いた手法、雀と少年がよくつきりと浮び出て斷ち切られた筈のこの印象が一層切實にしんしんたる餘韻となつて心を打つ。言葉少なく、しかも深い影を持つ、これがこの句の持味だ。

【南艸】 待ちに待つた秋祭も、楽しく終つてしまふと、少年は急に淋しくなつて、再び、大空をたゞ飛び廻つてゐる雀に、懐しさを覺えたのだらう。少年の無邪氣な氣持を、何んの飾り氣もなく、たゞ單純に、素朴に詠つてあるところがよい。たゞ慾を云へば、雀と少年との關係をもう少し即いたやうに、表現してもよいのでないかと思はれる。

草に咲く枝に鳴いてゐる一軒一軒少女郵便配達 櫻田輝郎

【晴星】この句の少女は郵便夫に代つて従事してゐるのか、小範圍に一括配達された家の少女か、兎に角作者は面白い境地を面白く表現してゐる。作者はこの句を作つて悦に入つてゐる。讀者にも面白い、全く面白いといふに盡きるが、何れかと言へば表現の面白さで持つてゐる句である。「一軒一軒が上の二通りの家の様を振り分けて巧みによく入つてゐる。難を言へば上半の語句である。解るには解るが不十分な言葉である。字數に制約されない自由律では省略して引きしめるか否かは一句の生命にも及ぶ大切なものであるが、言葉は早口に半端に言はば安全でありたい。この儘で感じが詩的に表現されてゐるとして賛意を表し得ればいゝが、評者ば賞し兼ねる。「草に花咲いてゐる木に鳥鳴いてゐる」ではなからうか。或は「草に花がある木に鳥がある」でもいゝ。ゐるを重ねなくても差支ない。(鳥を入れれば「枝でなく「木」であらう)この點に不満はあるが郵便配達といふ切りも巧みでいゝ句である。一句草體の句といふ感である。

【白濁子】清新な句だ。秋朝の郊外のすつきりした氣分がよく出てゐる。句境に浸りながら郊外を散歩する作者の目に入るもの、耳に入るものすべて句の世界だ。足元には名も知れぬ雜草が花をつけてゐる。葉を散らし初めた枝からは小鳥の聲がしてゐる。いい氣持になつて歩を選んでゐると疎らに建てられてゐる郊外住宅清楚な少女が肩からかけた鞆から郵便物を一軒一軒と門の郵便受へ落してゆく。こんな情景だらう。前半風物に對する作者の感興が咲いてゐる鳴いてゐると重ねた啾啾的な柔かなリズムとなつて詠み出されて居り、その情景の中にふさはしい人物——少女——の動きがはつきりを一軒一軒で表現せられ、更に少女郵便配達と名詞を重ねた重いリズムでがつちりと受とめ、其の間一分の

隙も見せぬ手法、そこに秋朝らしい印象的の句を構成してゐる。

【南神】優しい少女の一軒一軒郵便を配達してゆく有様が「草に咲いてゐる」「枝に鳴いてゐる」で、非常に好しい詩情をそへる。だが、かうした散文的敘法が、はたして俳句の領域に屬するかどうかは大いに疑問がある。三十一音の短歌の音數を超過しても、尙自由律俳句の存在價値を認めようとするものは、舊來の俳句といふ既成觀念を否定した上に、その基礎を置かねばならない。然し少くとも俳句といふ既成觀念を認め、その歴史性、傳統性を幾分たりとも尊重するものにとつては異論があるであらう。「草に咲いてゐる」は、詳しく云へば「草に花が咲いてゐる」であり、「枝に鳴いてゐる」は、「枝に小鳥が鳴いてゐる」であつて、その間「花」「小鳥」を省略してゐるが、別にそんなに不都合を感じない。次に反對に原文から「一軒一軒」を省略してみると、少女の郵便配達が如實に表はれて來ない。最後の「少女郵便配達」は、この句のテーマであつて、どうしても省略することが出來ない。さうすると、この散文的敘法は、詩の構成上無難なものになつて來る。然し、この散文的音數律を十七音の俳句性を奪ふものからみると、どうしても再検討しなければならなくなつて來て、もつと異つた表現法を求めなければならなくなるであらう。ここに自由留律俳句の理念の問題が惹起するわけである。

さめざめ葉ごみ雨を祈暮るゝ木下わかず 關口比呂志

【晴星】此の句はえらくこつ／＼して意味もわかりにくい、それは「さめざめ葉ごみ」と言ふ言葉が判然しないからである。私は須らく「の」の字と補ふべきだと思ふ。即ち「さめざめ葉ごみの雨を」である。これなら意味が通る。作者の意圖と違ふか知れぬがこれでありたい。葉ごみ切れず雨をまで一息である。木下は木の下とすべきであらう。更に一步

立入ると私には「さめさめ」は少し行き過ぎの感がある。思ひ切つて無い方がいゝ。

「葉ごみの雨を枳暮るゝ木の下わかず」これで佳い句と思ふ。この場合の木が枳であることは甚だしい。「木の下わかず」は大げさの様でもあるが、此場合賛成である。

【南艸】枳の木の葉込にさめんと降りそゞ雨も、いつの間にか暮れて来て、木下の判り兼ねるやうに薄暗くなつてゐる。ちつと一點に心を集めて、凝視してゐる作者の眞深い觀察をよるこぶ。この句、濛い深みのある句であつて、大正初期の新傾向時代の眞ひの強い句である。

冬菜こまかくはえ揃ひ朝は朝の日夜は月明り 植 田 市 籠

【晴星】途中まで實にいゝ表現と思つたのが讀み了つてヒントがぼける氣がした。「朝は朝の日か」「夜は月明り」か何か一つあればいいのであつて重けては御馳走過ぎてリズムもわるく餘韻がなくなると思ふ。どちらを除くかとなると「夜は月明り」と割愛して朝は朝の日で切つてしまひたい。それで十分に情趣のあらはされた佳句である。上半は實にいゝ見方であり、「こまかく」は此句の生命である。一句自然に對する愛が出てゐる。

【白老予】近頃よく見かける都會風景の一つだ。チツト家の前の——その家も格子作りのしもた屋——道路の片隅に土を盛り上げて作つた家庭菜園に對する作者の愛着とまで思はれる感情を詠み出したものだらう。勿論觀賞する人によつてまち／＼であらうが、畑としても家のすぐそばの餘り廣からぬ家庭菜園だらう。つとめに出る前の朝と、つとめから歸つた夜の月明と、家に入入りする毎にしみ／＼とこの野菜に見入つてゐる作者の愛着をまじまじと感ずる句だ。

こまかく生え並ひの觀察の中にも、朝夕見入つてゐる作者にして初めて其の味があり、朝は夜はの重ね方にしても其のことは言へる。作者は何時を見て詠んだかの疑問も起るが、朝でも夜でもよいと思ふ。一つのものに對して朝な夕な感ずる感情、それは必ずしも直觀的感情の範圍にあるべきものではない。ゆる／＼と時間的に續く感情にして、一層しみ／＼とこみ出る様に味が出る。そのむづかしい表現を手易く朝は朝の日夜は月明りで言ひ得てゐる。青菜と言はず冬菜の新しい表現、こまかく生え並ひの細かな清新な觀察は、朝は夕はのむづかしい時間的の感情と相まつて、リズム的にもしつとりと構成された其の手法、凡乎に非ずの感が深い。

【南艸】親しみを感じて、朝と云ひ、夜と云ひ、ひとり眺め入る作者の精進は尊敬に價するが、かうした散文的技法は、一つの懐しい氣分を表はす場合に効果的であるが、どうも一句の打つて來る力が稀薄である。「朝は朝の日」「夜は月明り」で、冬菜に對する感動が朝ともつかず、夜ともつかず、頗る曖昧であつて、肝心の詩情が眞綿でつんだやうに感じられて、句の迫力が鈍らしてゐる。ここにこの句の問題があつて、幅廣く詠ばうとして却つて損をしてゐる。

草に咲いてゐる枝に鳴いてゐる。一軒一軒少女郵便配達 櫻田輝郎

【晴星】この句の少女は郵便夫に代つて従事してゐるのか、小範圍に一括配達された家の少女か、兎に角作者は面白じ境地を面白く表現してゐる。作者はこの句を作つて悦に入つてゐる。續者にも面白い、全く面白いといふに盡きるが、何れかと言へば表現の面白さで持つてゐる句である。「一軒一軒」が上の二通りの家の様を振り分けて巧みによく入つてゐる。難を言へば上半の語句である。解るには解るが不十分な言葉である。字数に制約されない自由律では省略して引きしめるか否かは一句の生命にも及ぶ大切なものであるが、言葉は早口に半端に言はば安全でありたい。この儘で感じが詩的に表現されてゐるとして賛意を表し得ればいゝが、評者は賛し兼ねる。「草に花咲いてゐる木に鳥鳴いてゐる」ではなからうか。或は「草に花がある木に鳥がある」でもいゝ。あるを重ねなくても差支ない。(鳥を入れば「枝」でなく「木」であらう)この點に不満はあるが郵便配達といふ切りも巧みでいゝ句である。一句草書體の句といふ感じである。

【白鷺子】清新な句だ。秋朝の郊外のすつきりした氣分がよく出てゐる。句境に浸りながら郊外を散歩する作者の目に入るもの、耳に入るものすべて句の世界だ。足元には名も知れぬ雑草が花をつけてゐる。葉を散らし初めた枝からは小鳥の聲がしてゐる。いい氣持になつて歩を運んでゐると疎らに建てる郊外住宅清楚な少女が肩からかけた鞆から郵便物を一軒一軒と門の郵便受へ落してゆく。こんな情景だらう。

前半風物に對する作者の感興が咲いてゐる鳴いてゐると重ねた咏嘆的な柔かなリズムとなつて詠み出されて居り、その情景の中にふさはしい人物——少女——の動きがはつきりと一軒一軒で表現せられ、更に少女郵便配達と名詞を重ねた重いリズムでがつちりと受とめ、其の間一分の

隙も見せぬ手法、そこに秋朝らしい印象的の句を構成してゐる。

【南洲】優しい少女の一軒一軒郵便を配達し大ゆく有様が、「草に咲いてゐる」「枝に鳴いてゐる」で、非常に好しい詩情をそへる。だが、かうした散文的敘法が、はたして俳句の領域に屬するかどうかは大いに疑問がある。三十一音の短歌の音数を超過しても、尙自由律俳句の存在價値を認めようとするものは、舊來の俳句といふ既成觀念を否定した上に、その基礎を置かねばならない。然し少くとも俳句といふ既成觀念を認め、その歴史性、傳統性を幾分たりとも尊重するものにとつては異論があるであらう。「草に咲いてゐる」は、詳しく云へば「草に花が咲いてゐる」であり、「枝に鳴いてゐる」は、「枝に小鳥が鳴いてゐる」であつて、その間「花」「小鳥」を省略してゐるが、別にそんなに不都合を感じない。次に反對に原文から「一軒一軒」を省略してみると、少女の郵便配達が如實に表はれて來ない。最後の「少女郵便配達」は、この句のテーマであつて、どうしても省略することが出來ない。さうすると、この散文的敘法は、詩の構成上無難なものになつて來る。然し、この散文的音數律を十七音の俳句性を奪ふものからみると、どうしても再検討しなければならなくなつて來て、もつと異つた表現法をとらねばならなくなるであらう。ここに自由留律俳句の理念の問題が惹起するわけである。

さめざめ葉ごみ雨を枳暮るゝ木下わかず 關口比呂志

【晴星】此の句はえらくこつ／＼して意味もわかりにくい、それは「さめざめ葉ごみ」と言ふ言葉が判然しないからである。私は須らく「の」の字と補ふべきだと思ふ。即ち「さめざめ葉ごみの雨を」である。これなら意味が通る。作者の意圖と違ふか知れぬがこれでありたい。葉ごみ切れず雨をまで一息である。木下は木の下とすべきであらう。更に一步

立入ると私には「さめさめ」は少し行き過ぎの感がある。思ひ切つて無い方がいゝ。

「葉ごみの雨を枳暮るゝ木の下わかず」これで佳い句と思ふ。この場合の木が枳であることは甚だしい。「木の下わかず」は大げさの様でもあるが、此場合賛成である。

【南艸】枳の木の葉込にさめんと降りそゞ雨も、いつの間にか暮れて来て、木下の判り兼ねるやうに薄暗くなつてゐる。ちつと一點に心を集めて、凝視してゐる作者の眞深い觀察をよるこぶ。この句、濛い深みのある句であつて、大正初期の新傾向時代の眞ひの強い句である。

冬菜こまかくはえ揃ひ朝は朝の日夜は月明り 植 田 市 籠

【晴星】途中まで實にいゝ表現と思つたのが讀み了つてヒントがほける氣がした。「朝は朝の日か」「夜は月明り」か何か一つあればいいのであつて重れては御馳走過ぎてリズムもわるく餘韻がなくなると思ふ。どちらを除くかとなると「夜は月明り」と割愛して朝は朝の日と迄で切つてしまひたい。それで十分に情趣のあらはされた佳句である。上半は實にいゝ見方であり、「こまかく」は此句の生命である。一句自然に對する愛が出てゐる。

【白老予】近頃よく見かける都會風景の一つだ。チツト家の前の——その家も格子作りのしもた屋——道路の片隅に土を盛り上げて作つた家庭菜園に對する作者の愛着とまで思はれる感情を詠み出したものだらう。勿論觀賞する人によつてまち／＼であらうが、畑としても家のすぐそばの餘り廣からぬ家庭菜園だらう。つとめに出る前の朝と、つとめから歸つた夜の月明と、家に入入りする毎にしみ／＼とこの野菜に見入つてゐる作者の愛着をまじと感ずる句だ。

こまかく生え並ひの觀察の中にも、朝夕見入つてゐる作者にして初めて其の味があり、朝は夜はの重ね方にしても其のことは言へる。作者は何時を見て詠んだかの疑問も起るが、朝でも夜でもよいと思ふ。一つのものに對して朝な夕な感ずる感情、それは必ずしも直觀的感情の範圍にあるべきものでは無い。ゆる／＼と時間的に續く感情にして、一層しみ／＼とちみ出る様に味が出る。そのむづかしい表現を手易く朝は朝の日夜は月明りで言ひ得てゐる。青菜と言はず冬菜の新しい表現、こまかく生え並ひの細かな清新な觀察は、朝は夕はのむづかしい時間的の感情と相まつて、リズム的にもしつとりと構成された其の手法、凡乎に非ずの感が深い。

【南艸】親しみを感じて、朝と云ひ、夜と云ひ、ひとり眺め入る作者の精進は尊敬に價するが、かうした散文的技法は、一つの懐しい氣分を表はす場合に効果的であるが、どうも一句の打つて來る力が稀薄である。「朝は朝の日」「夜は月明り」で、冬菜に對する感動が朝ともつかず、夜ともつかず、頗る曖昧であつて、肝心の詩情が眞綿でつんだやうに感じられて、句の迫力が鈍らしてゐる。ここにこの句の問題があつて、幅廣く詠ばうとして却つて損をしてゐる。

草に咲く枝に鳴いてゐる。一軒一軒少女郵便配達 櫻田輝郎

【晴星】この句の少女は郵便夫に代つて従事してゐるのか、小範圍に一括配達された家の少女か、兎に角作者は面白じ境地を面白く表現してゐる。作者はこの句を作つて悦に入つてゐる。讀者にも面白い、全く面白いといふに盡きるが、何れかと言へば表現の面白さで持つてゐる句である。「軒一軒」が上の二通りの家の様を振り分けて巧みによく入つてゐる。難を言へば上半の語句である。解るには解るが不十分な言葉である。字數に制約されない自由律では省略して引きしめるか否かは一句の生命にも及ぶ大切なものであるが、言葉は早口に半端に言はば安全でありたい。この儘で感じが詩的に表現されてゐるとして賛意を表し得ればいゝが、評者は賛し兼ねる。「草に花咲いてゐる木に鳥鳴いてゐる」ではなからうか。或は「草に花がある木に鳥がある」でもいゝ。あるを重ねなくても差支ない。(鳥を入れば「枝」でなく「木」であらう)この點に不満はあるが郵便配達といふ切りも巧みでいゝ句である。一句草體の句といふ感である。

【白雲子】清新な句だ。秋朝の郊外のすつきりした氣分がよく出てゐる。句境に浸りながら郊外を散歩する作者の目に入るもの、耳に入るものすべて句の世界だ。足元には名も知れぬ雜草が花をつけてゐる。葉を散らし初めた枝からは小鳥の聲がしてゐる。いい氣持になつて歩を運んでゐると疎らに建てられてゐる郊外住宅清楚な少女が肩からかけた鞆から郵便物を一軒一軒と門の郵便受へ落してゆく。こんな情景だらう。

前半風物に對する作者の感興が咲いてゐる鳴いてゐると重ねた咏嘆的な柔かなリズムとなつて詠み出されて居り、その情景の中にふさはしい人物——少女——の動きがはつきりと一軒一軒で表現せられ、更に少女郵便配達と名詞を重ねた重いリズムでがつちりと受とめ、其の間一分の

隙も見せぬ手法、そこに秋朝らしい印象的の句を構成してゐる。

【南陣】優しい少女の一軒一軒郵便を配達してゆく有様が「草に咲いてゐる」「枝に鳴いてゐる」で、非常に好しい詩情をそへる。だが、かうした散文的敘法が、はたして俳句の領域に屬するかどうかは大いに疑問がある。三十一音の短歌の音數を超過しても、尙自由律俳句の存在價値を認めようとするものは、舊來の俳句といふ既成觀念を否定した上に、その基礎を置かねばならない。然し少くとも俳句といふ既成觀念を認め、その歴史性、傳統性を幾分たりとも尊重するものにとつては異論があるであらう。「草に咲いてゐる」は、詳しく云へば「草に花が咲いてゐる」であり、「枝に鳴いてゐる」は、「枝に小鳥が鳴いてゐる」であつて、その間「花」「小鳥」を省略してゐるが、別にそんなに不都合を感じない。次に反對に原文から「軒一軒」を省略してみると、少女の郵便配達が如實に表はれて來ない。最後の「少女郵便配達」は、この句のテーマであつて、どうしても省略することが出來ない。さうすると、この散文的敘法は、詩の構成上無難なものになつて來る。然し、この散文的音數律を十七音の俳句性を尊ぶものからみると、どうしても再検討しなければならなくなつて來て、もつと異つた表現法をとらねばならなくなるであらう。ここに自由留律俳句の理念の問題が惹起するわけである。

さめざめ葉ごみ雨を枳暮るゝ木下わかす 關口比呂志

【晴星】此の句はえらくこつ／＼して意味もわかりにくい、それは「さめざめ葉ごみ」と言ふ言葉が判然しないからである。私は須らく「の」の字と補ふべきだと思ふ。即ち「さめざめ葉ごみの雨を」である。これなら意味が通る。作者の意圖と違ふか知れぬがこれでありたい。葉ごみ切れず雨をまで一息である。木下は木の下とすべきであらう。更に一歩

立入ると私には「さめさめ」は少し行き過ぎの感がある。思ひ切つて無い方がいゝ。

「葉ごみの雨を栞暮るゝ木の下わかず」これで佳い句と思ふ。この場合の木が栞であることは甚だしい。「木の下わかず」は大げさの様でもあるが、此場合賛成である。

【南艸】栞の木の葉込にさめくんと降りそゞ雨も、いつの間にか暮れて来て、木下の判り兼ねるやうに薄暗くなつてゐる。ちつと一點に心を集めて、凝視してゐる作者の奥深い觀察をよるこぶ。この句、濛い深みのある句であつて、大正初期の新傾向時代の奥ひの強い句である。

冬菜こまかくはえ揃ひ朝は朝の日夜は月明り 植 田 市 籠

【晴星】途中まで實にいゝ表現と思つたのが讀み了つてピントがぼける氣がした。「朝は朝の日」か「夜は月明り」か何か一つあればいいのであつて重れては御馳走過ぎてリズムもわるく除韻がなくなると思ふ。どちらを除くかとなると「夜は月明り」と割愛して「朝は朝の日」迄で切つてしまひたい。それで十分に情趣のあらはされた佳句である。土半は實にいゝ見方であり、「こまかく」は此句の生命である。一句自然に對する愛が出てゐる。

【白蓮子】近頃よく見かける都會風景の一つだ。チツト家の前の——その家も格子作りのしもた簷——道路の片隅に土を盛り上げて作つた家庭菜園に對する作者の愛着とまで思はれる感情を詠み出したものだらう。勿論觀賞する人によつてまち／＼であらうが、畑としても家のすぐそばの餘り廣からぬ家庭菜園だらう。つとめに出る前の朝と、つとめから歸つた夜の月明と、家に入入りする毎にしみ／＼この野菜に見入つてゐる作者の愛着をまじまじと感ずる句だ。

こまかく生え並ひの觀察の中にも、朝夕見入つてゐる作者にして初めて其の味があり、朝は夜はの重ね方にしても其のことは言へる。作者は何時を見て詠んだかの疑問も起ぬが、朝でも夜でもよいと思ふ。一つのものに對して朝な夕な感ずる感情、それは必ずしも直觀的感情の範圍にあるべきものではない。ゆる／＼と時間的に續く感情にして、一層しみ／＼とにぞみ出る様に味が出る。そのむづかしい表現を手易く朝は朝の日夜は月明りで言ひ得てゐる。青菜と言はず冬菜の新しい表現、こまかく生え並ひの細かな清新な觀察は、朝は夕はのむづかしい時間的の感情と相まつて、リズム的にもしつとりと構成された其の手法、凡乎に非ずの感が深い。

【南艸】親しみを感じて、朝と云ひ、夜と云ひ、ひとり眺め入る作者の精進は尊敬に價するが、かゝした散文的技法は、一つの懐しい氣分を表はす場合に効果的であるが、どうも一句の打つて來る力が稀薄である。

「朝は朝の日」「夜は月明り」で、冬菜に對する感動が朝ともつかず、夜ともつかず、頗る曖昧であつて、肝心の詩情が眞綿でつつんだやうに感じられて、句の迫力が鈍らしてゐる。ここにこの句の問題があつて、幅廣く詠はうとして却つて損をしてゐる。



選句錄

井泉 水選

こわれた水車小屋に星が空いつげいの星となる

平松 星 童

星、つららからつららがさがさがる

なみだふきながらくがきしてゐる

そらからこぼれてこるこるこる

やまのまちあるくやまのえきまでのあきのひ

夕やけそらの道犬と私とかへる犬のしつぽ

月と風とこぼるぎこちもやられてゐる

星がよるにくつついてゐる 窓

一番星出るところからすかへるところをけんぼん虹にごんぼぬ

山の町ひとすぢ一寸出ると芒の川の方へ曲つていく

しぐれになりましたと柿の皿に柿の種出す

井上 有紀 男

水がこの邊で曲つて芒に鐵橋、の見えてゐる

曇り日瓦簾のその家の山茶花咲いてゐる

北田 山口 彦

町がほんのひとすぢ、の銀行と見えてゐる海と秋

散る 巖 に 波 が あ る

里井 正 子

あぜ豆がさいばむころの氣象特報が出てゐる雨

淋しい湯の夕べがくるおぜんの赤い小えび(訪伊東光子様二句)

なつめの實のあまつばいような實のさびしくはなす

岩にしぶき岩に釣る 高崎 貞之

木の雪屋根の雪と晴れて旗日の旗

うみなりのみあかし

からだ二つを生きてかへり麥播くはだし

橋の雪舟の雪ちらほらふつてゐる雪

みかんの木にあるみかんとはい海に船のある

雨が明けて止んだところ移の花が咲いたところ

雨ふつた石段が海から月夜となつた下駄の音で

鶺鴒と女のある壁の畫に海から日ざしが秋で

花に、アトリエの試作したものなどに秋の日だけてゐる

没り日今山に落つるところ渡し渡つた人のゆく

雨の日は一日雨降るこな屋のこぼれ秋の芽

山の秋は早い分教場のぶらんこ

芒の枯れ穂のやうな晝の月で掉一本のくらし

村の一とままりの墓と秋がきた火の見と渡し場へ行く道

植田 市 籠

墓、かげもてのひら を 合せ る

岡野 宵 火

日本が負けたとこれからのこと人のもつ吊皮私のもつ吊皮

三好 米 子

電車が跡跡ばかりはしつてこの頃雨ばかりで

溝そばはほんのりうす紅いろに録といでゐます

つきよがつづくわかれてみづおと

山が紅葉するこの村の少年道おしへてすたすたいく

世の中の目まぐるしさは新聞で見えてゐる柿の葉のふる

山鳩一羽とびたつ朝の炭焼小屋にきてゐる  
 孤雲と云つたやうな白い雲である柿のみぢ  
 山茶花散りどきの庭の箒目客としてゐる  
 河原くれると道が一本橋につづいてゐる秋  
 散る木も散らぬ木も池のおもて雨  
 なにやら冬の蟲が秋深い歎をおく光り  
 月夜の影法師と、本を抱へて歸ります  
 もうそのことは、小さな赤い草の實です  
 葉のない木が月夜の坂道になつてゐる  
 霧のなから花持つて嬢さん霧のなかへ消えてしまつた  
 黒い牛つれて秋晴れ夫婦で来る  
 みんな思つてゐてくれてゐて故里のこゝろをくらしへると  
 丈高いコスモス、幼稚園へ子ども行つてまゐります  
 遠い山と近い山は色がちがひますと先生、秋の日一ぱい  
 いくさの生活から生活のいくさにはいつてゆくことを、山は紅葉  
 水田影して榛の木、遠くにも榛の木  
 箱白い石が水の中の石の上に、せきれい  
 時たま葉がちる石やがこまかいところさざんでゐる  
 いなご味噌かんばんしく男ひとりのくらしをくらす  
 あさまはつゆきつきよのけむり風のある  
 いちにておきのひとつぶの白いくすりな、さゆのゆげ  
 朝の牛つれただして朝日さしそめし薄  
 葉をなくして實をなくして柿の木しづくする  
 祭のはやしもすでに夕日の秋山の稜線  
 堯に干しひろげたものなどお彼岸のお日和

有竹四郎

武田桂

上野忠三

佐藤龍

佐藤専子

唐辛子一つ一つ空へ向いてよく晴れた空  
 雲が雨ふるもみぢの中の松の木  
 霜がひる近く乞食とこどもたちとおまつり  
 霜掃いたほうきも朝日になる  
 トネル出るとつきよ巖に白なみする  
 刈田の夕やけが月のあかるさになる松の木  
 ふつてはれた朝の空青しみようの花  
 名月のゆで豆たべてゐる顔の、すでに復員  
 冬越す大根いける夕焼消え残り  
 枯木に月の明るさも夜なよな遠山の雪  
 米をはかる四等國の民としてこんなうるばしい米の粒々  
 秋めく山稜線と夕風のふく  
 一つ一つがよく鳴きみんなよく鳴き、鳴き惚れ  
 零餘子もぐとてこぼして拾へば片手に餘り  
 稻刈つてゐる頬被雲は影しては行く  
 晝月に稻掛ける乾いてくる匂うてくる  
 荒れつくした風に満月  
 枝の小鳥の影がある石の字をよむである  
 日のとどくかきりを吹いてくる冬の、野の橋  
 寝るころには山に月がかけり野は冬星のあふれ  
 水をたたへて雪がふりくる  
 すつかり揃つた麥の踏み方生徒たち夕焼  
 雪の景色が四角な露絲學校と枯れ桑畑  
 花屋の花に薄い氷に日のさして朝  
 年の暮は木の下枝、啼いてゐる

日向野秀策

増村辰郎

森田十雨

櫻田悠子

村田白鷗

さざ浪声の芽舟漕いで来る

あかいコスモス白いコスモスもうたそがれです

一面刈田となつて火の見櫓は静かな遠足が通る

空を見てなまくなつてくらよ十一月のつばくらよ

雲の動きも十一月の蜜柑探歌がきこえる

何もかも退職して裏山色々の小鳥が聞こえる

山と山のあひの田が豊作で対つてゐるおてんき

こん夜世界のすみずみまででんきが點るうちのでんき

又も不連続線がふらしてゐる雨が藪の葉

花が散つてからも葉の青い萩とそのほかの木々の、秋

てふてふがさしきを通りぬける、かぜ

池の空は木があつて葉が散つてゐる道

窓が秋の雨の遠くの松原のもつ線、朝

枯れて山をはなれし月となれば橋や川や

だんだん日のつまつてくるさせるをわく

子に戒名が出来て柿に雨降つてゐる

また昔のガマ馬車になつて筑波へ稻の積れてゐる道

音ばどんぐりのおちる毎晩月夜がつづく

何と月の明るさはおみなへしをとこへし

入江袂になつぶり潮がみちてゐて白いせきれい

月夜馬小屋のよこ極の花馬が顔出したりする

ときどき雲から日のさしてきて棉の畠の花であり

夜更け響者をよびにきて月が明るい芋の葉

かほの驅おふことのこれが見おさめになるのかとも

佛にして青い林檎を供へまた堅さうなのを

南川 鴻亮

名雪 理輝

佐藤逸仙子

一色 如佛

井形 春一

浅井 冬二

山に雪がきてしづかなる雪の朝ふるさと

戻るときの海が見ゆるだけの月夜の石

本を懐にして獨り山の松茸の香は静かすぎる

山に来てアメリカの船見ゆる秋風を顔に

たしかに玉音を雑音の中から聞き、謹みて承り

吾等の道は唯一つ風が吹くと散る葉ばかりな

防空壕もがまが手をついてゐるばかり

あみほしてある秋空しづかに波音

野つ原すすきとなり石があつて鳥

湯町にも酒はなくて湯に入つて海を見て秋

あつい日が山に入るころの山の松の木

松山の松と竹藪の竹と夕映えの足を洗つてゐる

としより大きな蟲眼鏡で上から下へ読んでゐる日雨が秋

嵐になるのかもしれないトマトの木のうちなりトマト

夜が明けにくる鳥居の雪、帽をとる

生きて居れば、腕あとから桐り出さうとする

梨の花の返り咲き武器のない兵隊が還る

乳房に秋の朝日、乳がバケツへたまつてゆく音で

朝のうち一雨した稲架

山の色は一時雨はれた柿商人とちいさん

秋雨日がさしてバラックばかり建つ

朝のうちお経あげてゐる家など葉紅葉

山栗ほせてあたたかい猫がちちくられてゐる

駕は輪をかく白い雲菊の花のしづかな

もやの中からもつのごゑ朝の體操がばじまる

佐伯美則

小西佛舍利

菅崎道雄

原 實

畠山實治

中西國友



水仙白く咲いてゐる村の海がまつたく風いでゐる  
八ツ手の葉とその八ツ手の影と冬  
稻の穂うつすら青い月夜となり流に添ふ道  
竹のなかはあかるい雨竹をきりにきてゐる  
知つてゐるのは北斗七星だけの美しい星空である  
うちでとれた胡麻といふ紫蘇の實の漬物もいたたく

薯畑の薯の花二つ三つ咲く、朝  
さざんくわ咲くとかげは月になる  
水にちいさく咲いて秋の蝶々

内藤英夫

しらぎく月のくらがり咲いて白し  
木の葉ちる星がひとつひとつ消えてゆく  
かれあし朝は日のさし潤れてゐる  
還つてきてしみじみ白い障子の日ざし木の柿  
嵐のあとのおい日和の道の響が稻の穂

日野素木

垂れて稻の穂、降つた後の流れてゐる  
局へつとめてゐる娘さんでけさ早い菊もつて通る  
見晴らせてうつくしく秋が港船が出てゆく  
水音由はれてくる木の中きのことりながら

鹽田正吾

牛を啼かせてとほつた秋の終り  
袋にとつた蝗外の目にかれてゐるいなご  
みづうみの水の底がふゆ

あめふる道の水たまりみづたまりにふる  
荒れて荒れた風がまだのこつてゐるへちま  
葎草いつぼん夕日の影がすずしうなる

澤木昭二

一日降つたあめのとが月夜でそはの花の畑一枚

三井不二雄

日ざしも落葉も秋がもうふかい入江の部落  
はつきり秋といった星がいつげい海近い橋をわたる  
一本の紫苑が秋の縁をもち子供の子供の三輪車

辻村追鳥子

障子あげたままの月栗むいてゐる  
うどの花へ蜂が来てゐる毎朝通る  
倉の窓が明いてゐて柿の木月夜の雲が白い  
町の灯もついてうちの灯もついて膳にすわり  
汽車のけむりがかけらす道をいそぐ冬になる

三井澄雄

顔を並べて梅が咲いてゐる寫眞とる  
一兵として征く兄を、花が葉になる  
月の夜道を茶の花が咲いてゐて一人で通る  
照ればよし降れば解かな山中百合が来ては鳴く

福本逸子

草の實をつけてきて郵便屋さんよ雨の中  
雀ずぶぬれになつて雀同志で海は荒れてゐる  
日がかたむくと脚がかげつてゐる冬の日  
鯛がある蜜柑がある空の田舎の病んでゐる

吉川群孤

うみはなつ朝スカールすべりゆく  
朝風、遠くの町の汽笛が富士に響ふつた  
つなみのやうな耳鳴りを秋を深夜を

永田二郎

外はロスマス、カンナなど廻轉椅子でよくなつたと云はれる  
柿一ついつもここを夕焼に通ります  
夕日のそのの雲が水にもあつてお城は松の中

加藤白水壇

月へ水尾のべて漕ぐ  
厩には馬がゐて秋のあめふる

浅野智秋

青葉のあざやかさは夕雲の流るる菜園

木の間霧しらすらと灯して余利殿と見ゆ  
 鯉のかすかな影か淺き水秋日のさし  
 露れまばうす日に濡れて栗の實栗の葉  
 山に露が見えたと云ふ濛柿もぎつてある  
 紫苑、流れに鉄を洗ふと暮れてゆく  
 渡つてきた鳥の二三羽つれてとぶ深いか  
 立札の横文字はちよつとみてゆく家の木のみぢ  
 雑木もみぢ、稍架けた上に虹をみる  
 水がひくと屋根に干すものばあつて赤いとんぼ  
 郵便も娘さんで来る南天の實が赤い  
 あかぎれのある手で暖いとろる汁いだきま  
 どこまでも青い空の豆の莢のかわく音でひとり  
 問へばよく教へてくれる子とゆく山は露らし  
 生えたての蓼の芽の今日も好き陽昇るよ  
 どちらも蟲をちこち藁屋朝鐘のいわし雲です  
 月夜は燒跡の水の道の出しつ放しの水音  
 絹糸のような若芽が土を上げてゐるぞ  
 どんどことんどこと祭太鼓が秋、水車は廻つてゐる  
 まんじゆさげ子供が新開くばつてゆく  
 雲がすうつと刈田四五枚影にして起きてゐる病人  
 かげ膳の箱にもたらぬ箱におさまりかへつてきたか  
 丘の家ヲオ音楽みんな働いてゐて秋の日  
 癒む時は病むがよしとはいふもの秋ふかし  
 ラオオの落語の時間コホロギばかりないてある  
 ひるすきとしづかにふるあめ

- 増田折莖子
- 梶本芦城
- 森景諫郎
- 栗田千可志
- 星野あきら
- 飯田恒夫
- 堀切春扇
- 鈴木裸蟬
- 小野寺大葉子
- 北田乃木彦

朝は柳に風が散るばかりの安全地帯  
 燒煉瓦から芽が出た秋の雲た  
 くれて明るく菊の宿に着いたところ  
 りんだうの花、花筒はさびて住まふや  
 肥車のあとからゆく海邊の秋日  
 みんな職場に萩が雨となる  
 秋晴れ雲静かに動く畑に立つ  
 芋の供出すましてあたたかくて歸る  
 草の花は白いたそがれの秋がくもつてゐる  
 時雨降る朝は子ども眞紅の小菊もつて来た  
 南瓜のつる棟越えてゐる颯風警報  
 木屋の香が夕ぎらふてゐる  
 日暮から蚊帳釣つてひぐらし一しきり  
 水田は夕明りの柿おとす竿が明るく  
 心の傷を繪に仕上げして赤い一切の雲  
 山茶花、白い雲がもうお晝か  
 稲田へ雀きてゐて工事場の朝は焚火してゐる  
 松林は家を出ると数歩、秋流れてゐる  
 雨の降りさうな櫓の花、防空壕を埋める  
 雨の響がわらやれ秋の月が出ました  
 ほとりと吹雪やんでとなりの鯛の音か  
 ふたはないめしがにえてあなをいそら  
 少しばかりの雨も止んで窓のむこう木屋  
 戦傷のあとが疼くさうな山茶花咲いて白く  
 一片白い雲と山茶花の咲くばかりな

- 梁瀬阿羅興
- 折居遙子
- 水野一醇
- 鍋島次夫
- 小林秀洋
- 坂田義三
- 金高洋一
- 富田淑子
- 伊藤三澗
- 杉本行舟
- 加藤隆
- 川口雅子
- 瀬戸照子

いまは月が降り止んでゐる瀨の音  
 灯を濡らして行つた雨が月になつた精米所  
 物見岩などと晝飯にする紅葉してゐる  
 降り癖の今日も土間の種芋の枝を重れ  
 さうして暫くはお別れの咲くばかりの菊を切る  
 月夜は霧で並木は追分の方へ  
 子供霧の中でうたふて稲は稲架に  
 境内清らかにあるいてゐる鳩の脚があかい秋  
 夕べ長い橋がかかり秋も終りの白い川波  
 終戦後の青い空が朝々からす  
 稲架粗む人影の山から月になる  
 朝餉の日の照る障子雪どけの掣して来る  
 挿して貰つて赤い百合一りん瀧からとつてきたといふ  
 てぶが吹かれてゐる北風に吹かれてゐる風速計  
 プールに白いコース番號が水に秋めくそのいろ  
 三つ四つ赤い柿を木に土蔵の家など歸り途  
 時々蟲の羽音して菊の花白い障子に  
 大根畑のうす曇りこのあたりもツイアの通る  
 芋を煮てゐる秋、今日疎開の子歸る  
 一日稲刈り空飛ぶは日本の機ではない  
 刈りとりて稲穂のかるき刈りすすむ  
 白雲漂々として壺うりなどがこの頃あたたかし  
 かつこうが鳴くころと葉書に切手はつてある(滿洲にて)

松に夕日、あの子はなぜ泣いてゐる

谷口晃男

東信太郎

伊達宗勝

水野田々詩

下田 麥

五十嵐みい

石井洋音

吉原三郎

關根盛水

松原明雄

市川滿哉

杉浦經子

貝の一つ一つ小さな貝も陽がてつてゐる  
 看護婦が拾うてくれて紅葉の一枚一枚  
 白菜の一つ一つに秋の日獨り蟲を取る  
 鳥はもうなんにもないしその實雨にぬれてゐる  
 出水の引けば庭の隅のどくだみの花日の暮れ  
 芝生の色もう冬であつてあたたかい色で  
 入いきれの體臭の春うららかな空  
 黄昏、富士がまだくつきりと寒く  
 寫生する子は城跡がまだらまだらの冬日  
 工場生活も寮舎の萩咲いて秋が来た  
 若き學徒等は情熱にかたり冬の夜に花咲く  
 白が調子よくて冬の夜目覺めて未だ挽いてゐる  
 たをへ瘦せ穂でもお月様へ、丸い背なして兎は搗いてゐる  
 天高ければこちんまりした城下町です  
 シュープの尾燈月あかりの東海道をゆく  
 落ち柿ひろふ子なども故郷に來て朝  
 つるばしが四ツ唄う秋の日まだ暑く  
 杉の中にもなくハタオリが秋は夕焼  
 月明りのいつげいな青菜が庭先  
 友は歸つた炬燵の冷えである友の心よ  
 霧朝、供出の芋背ふ子もゆく  
 ひる月であつて稲刈れば稻のかほりする  
 柔らかな朝日が掃溜の霜  
 冬木の雨に濡れたてるてる坊主の赤い帯も

堀木紺珠

橋本光男

吾柳倚一路

池原 修

藤野夢想子

升屋忠治

平田靜舟

望月 皓

杉本利夫

相田とし於

阿部 陸喜

松本清昭

霧朝、供出の芋背ふ子もゆく

青砥 遊水

大坂 綠峰

梅木 成敏

植村 子純

藤本 零餘子

出 禪 子 選

家居くもりいつからの繁苑しぐれてか 稻垣 一 鳴

ハローつてもしもしヨ子と米兵秋太陽  
さすが一茶の雪のやがて起重機じつと(柏原)

煙る夕かげろふとてけふ旅立つとて 淡路 呼 潮

生別十年そしてお前は死んで了ひ私は霜の墓を守る  
大鯊銭箱を開ける山内の人々これは冬の蜂

辛粥いよいよまうまく篠目の目立つ霜 森 林 五

寺は寺らしく朝々辛粥のくらしありがたい  
笑而不答ただ霜に合掌す(敗戦日本を直視して)

青いうれからんきにわけばぬき菜のかさ  
露を掘るよろこんで土から赤いおも

歛を休め山畑に思ふことなし茶のはな 福島農夫男

隣りない山暮しもう葉をおとしつつ木々  
耐乏と記すすけた襖の上にかかげ冬のびきたり

闇 の 芋 背 に 重 く 雨 關口比呂志

嫌にならぬ芋の飯ふかしくと秋  
通い入れた工場の門ひるびると鶏の二三羽

奇聲あげて國道の朗か子とMP 南 畝 三 坡

悲劇遂ふ女よ汝が不惑の敗戦の日  
峽は瀬々岩網代なす東こだまの黄葉

村雲時雨陽の古ル戸の白ダリア撃  
戦さの話もせぬ柿の皮剥く手さきのふるへ

篠栗ゆで干す繼蓆鶏の踏むまま  
牛盗まれた夜の颱風蜜柑大半とりとまつた

炬べりはなれぬ蠅うとき光り羽爪掴み捨つ  
病人煙草巻いて喫ふほどにめつきり秋深まり

かそかそよぐそばの花のほえて新しい氣持に勤める  
なにかまだ話たりないやうな煙草の火が消えてある

出勤前の紫煙くゆらして擲日に日に黄ばみ  
野菊咲くそのようどぼしく暮らす

耳遠う急病疲れしてこの事務を處理  
飼ひ馬人なつかしみ居る背頃覺めてゐた

夕の煙樹をれぶり出る裏戸の籠  
蚊をいとひ朝鮮にも睡る鶏ときつくる若鶏

富士は眞白な雪この朝の街は寒い  
干柿の窓はうす陽さしてある冬めく

連秋陽にちらちらと釣人の側を過ぎる  
命のはかなさがこの枯草とこの落葉

玉れぎの芽が冬陽にのびてあるこの青さと細さ  
伏して久し眞赤に燃ゆる鶏頭を目のまへ

うから等太根時く畑の上を星章あらはなる機翼  
弓箭を折り捨てし日も遠く月明の國原

きつれのかみそり群れ立つ藪で七夕竹を切る  
今宵七夕の小橋を通ることも川音に佇み

稻刈り行き畦に着けば小川の端 上 條 無 償

麥蒔り割當ての畝歩に五畝多く  
松に混る紅葉濃き叫ぶげらつつき

渡 邊 如 蘭

園 木 六 食 子

中 村 倉 次

小 川 一 灯

上 條 無 償



檢ヶ岳裾の大きさに霧の降る  
たしかに夜の黒菊でこわすとも一度いばう  
風邪しこもる老梅芽ぐむでなる 鈴木梅宇人  
晴れて日ぐれまいの陽が枯木の枯枝(燒跡所見)

獨り居のすすかけの黄葉陽あり  
ラオオきく燐栗の灰などかきまはし  
山風きけば冬菜の葉夕陽さし  
北山雪となり町の静けさ  
枯草穂草雪降る山の家並げむり  
樺林の夜風鳴る山道にくる道細く  
野をゆく一面の雪黒き藁かけ  
白き菊の花水凍る朝静かに歩む  
伊藤柳江

月下に流れてゆく水面誰にも懐古の情があるであらう  
懐古の情は不思議な力で追つて来て葛の葉の風にそよぐ  
月を見ることが出来ましたのと煙管にきざみつめながら  
ながむる月はまた高く江口のむかし水面の静けさ  
久野仙雨

立ち木あり落ち日浴びつ風に鐘つく  
雪雲の湖に鯨の油の流れ吹かれて西へ  
燒跡のまこと秋風ホツマテ小屋を出たはわれ  
旅のめざめの小耳づく川音と舟こぐ音と  
木影きよらかな水渡ししの舟動くよ  
日日秀峯見えて秋もまだ夏雲のくる  
鎌倉白羊城

濱へ月夜のこから松はつづくに風あり  
黄菊白菊の日南池の鯉は沈んである  
焚けるを竈はなれぬ秋深き朝百舌鳥  
佐藤鳴風子

枯野の枯薄人に追ひ越される道に  
夜濯ぎを繕え妻も一服す妻四十  
火桶があり降りだした雨は午前三時と知る  
街道筋はからつ風刈田よこれてある  
刈田あるいてきてひとり室にひとり居る  
松茸めしの夜の部屋がどこか冷えて  
楓から山を見る全山紅葉して日が照り曇り  
日溜る水田落穂芽を吹き沈み  
藤田三六亭

雉釣の子ら冬山ひくき家を遠のき  
雉追ひ走ぬ砂山そこら蕎麥刈り伏せし  
つれのままだに香けむる冬菜かかる窓(小使の死)  
村の保徳婦となつて行く妹の荷物運ぶ柿の實熟れ  
保健婦の宿舎は農業者の二階そこから忠靈塔が  
千柿甘くなつて子とたぶる句誌届いた  
太田青穂

山鳩二つ飛び行き雑木束れる友と夕べ  
市の塵へだてた紅葉木立の中の家なり  
水鳥ややに遠のく汀樹籬ふ我ら  
薪出しの獨りでひよつこり鹿に行き會ふ  
雀びよん／＼苦の霜水におとす朝  
徳田英夫

ちいさい蜂の来て日なた子が眠る  
忘れぬ水仙芽を出してある陽なた  
馬糞捨ふて戻れば八ツ手の花  
綱かるく干せてた盡曇つてくる  
多胡比左志

山の湖を釣りして来た人の葛の花  
あかるく牡丹雪ふつて瀬戸内の碧い潮流  
松村邦夫

小松生ふ砂山はあげ雲雀こどもクレヨン畫す  
 密柑のみどりの葉つば鳴とんでゐる  
 隣家の琴に秋の宵は母と姉に私  
 焚火羊を焼くの子供らと朝  
 今朝は晴れて配給の芋を庭の處々  
 寄り處なき心もてあゆみ川端に秋  
 鱧土しめりもてば蕎麥の花白  
 秋のあざやかなる朝の山  
 國敗れて山並みの容が秋を深く  
 街は秋のしづけさをジョブなどはしり  
 松籟もきかず秋の海ホッポに明けぬ  
 あかれさす嶋島山は秋なれば  
 老人夫婦諸畑の諸値等闇の世間話  
 とすればすきびがら美和の歸りの握り飯  
 炬燵の頬に冷たい風秋の風鈴  
 疎開荷物をとりに美和への星餘つて道  
 軒に落の葉つるし日足の短かくなつた庭  
 干柿をつるし冬のことなど妻と落を食べ  
 ひとところ黄に銀杏寺の位置を示しみぞれになりそうな日の面  
 緋に燃えて雪のさなかの椿點々  
 雪やけの顔ながら人に好かれる娘で黒瞳  
 トンネルを出てくる二日の飾り馬が初霜のみち  
 國明らかに海を控へ觸舟出てゆく  
 麥蒔総えぬ一本の穂草に風ある  
 薪に管切る雜木あり雜木焚きし火あり

横山空華

杉原明雄

川口三角洲

山中菊三郎

渡邊舒生

松尾十樹

泉大睦

秋の雨かきの木の朝の柿のへた  
 たてす暗らく秋の雨の障子きりばりが白  
 赤いあづきとかこのひよ子と秋の日  
 開墾畑に麥を蒔く大き松の切株があつて  
 ホウ主が窓邊の溝に咲いた蓼の花  
 家うらつづきの山畑に落掘りさなかの主  
 ハンドルぐつと押せば機械に生命  
 蚊帳吊てそしておもひ明日は歸省  
 寄り合て暖をとる火の氣もなく夜の寮  
 秋かぞ林檎に別れの陽が落つ(Sの歸郷を送る)  
 巫女を見送る女學生二人に杜の秋の陽  
 とうもろこしの焼くかほり灯は四軒並ぶ  
 湯女一人石段をのぼる今日も晴  
 ほんの一寸幸福になる南天の實が赤い  
 町すぢに枝豆のなつてゐるこんな町  
 夜々れむり深し秋の銀河かたむく  
 霜下り日毎白明に凜烈のあした  
 日向にいみぢき慈愛の母あまします  
 冬に備へて松切り倒す音のして萩散り  
 もくせい夕にかほり秋雨窓を打つ  
 おそ咲きの朝顔咲く復員のひと尋れてくる  
 何も彼も押し流した豪雨蔬菜の芽が光り  
 枯木立人ちらり見えて消えて今日も雨  
 鷗今日も来て啼く母にかけ勝の兄が戻り  
 兄の軍除なまりいつしか消え秋燈あかるく灯す

横關碧樓

佐藤春路

藤野夢想子

鈴木光

青柳尙一路

丹尾一明

木村梨雪

安田兔晴

森郁子

曇るとやばり寒い庭にゐて霜の木々  
 日曜お日和なれば野鳩も稻田にくる  
 夕冷えの穂草のしめり觸れてゆく  
 干鮎を吊せる月の障子かな  
 疎らになつた柿に今年も秋が過ぎてゆく  
 銀杏の枝が切られて冬がおとずれる眼にしみる  
 歌聲もひとしほ澄めり秋の畑  
 ふるさとやどの道行くも秋深し  
 秋も終りの薄日稻刈る手  
 これから寒くなる月光ふんで戻る  
 黄菊白菊朝日がさしてきた庭畑です  
 残置燈ともつたまま夜明けてゐる寒さ  
 落葉焚く雲のやうに煙らす中の芋を  
 歌をうたひつつ柿採るや山畑ひとり  
 新雪の雪光る饒達山はなれつつ  
 山のはつきり秋の日を肩くみて話す  
 夕葉檜の木風止みて雲二つ  
 晩に茶をのむ云ふも失笑學生又か諸  
 徑が枯原へやせ大根一本生へ日沈む  
 野分の石げしる水に樹々からも散る葉  
 時雨くる母に脊なむけて寝てしもうた子  
 秋日ごみ中から輪ゴム見つけて伸ばしては笑める  
 栗拾ふ嬉々として少女手に手に小籠  
 電車に乗れば筑波がみゆ學生それで一日  
 芋掘る日そばに客の来てあり話す

五十嵐 周之助  
根本敬之介

前川 水仙

杉本 利夫

山口 一夫

草部 松月

會田 保男

多々良 友彦

原、句 專

寺島 初美

渡那 優女

北川 寒雀

伊東 蓬左樓  
西垣 地影  
金松 董順

子供泣かされて戻る芋を蒸してをり母  
 熟るまま無花果を皆が見て夜雨上りぬ

一 碧 樓 選

柿の實が熟れ黍明地に静まつて一つの橋  
 歸農山動ゆず稻子の死が草原  
 鴨に水滿ち父人に水滿つる沼邊  
 鵜が網に死ぬる青年は青年の服着て冬浪  
 秋の日一つの山の現實瀉の向ふ男鹿の山なり  
 山に雲かゝるを行き杉山の杉の木の根  
 秋の日霞の風音を聞き瀉に瀉舟  
 こゝから岩手山へ行ける驟の原つげの草蓼草  
 多少英語をやり栗の皮ちらかし  
 僕が友だちの顔を見る小春日の明り  
 秋日でる手のところさみしものを持ち  
 霜おりの芋粥を食べるときの日さし  
 雨の日老大工述懐道具箱の道具冷えて  
 朝の海冷え鯛をおろし男たち船を洗ひ  
 漁師そこから竿を使ひ秋朝水に波たてずくる  
 地のくらくなり一方へよせし諸蔓  
 冬木紛れなく鴨の聲す彼方に  
 われに父母なし霜朝の鴉地にある  
 冬帽目深にかむる男の腰太く

川島 南海城

渡部 冬三

山崎 多加士

星野 武夫

近藤 紫村

吾等南瓜を食へ冬木生きてゐる  
 國とある家のかまへ稚の秋芽のびたり  
 蕎麥の花よろしわが庭にさきて秋の日  
 大蕪といふびつし芽生えしへしやがみ秋朝  
 菊つくる母と菊が小菊でつぼみをもち  
 早場鎌を入れるべし馬の顔々乾き  
 船に薄日てる釣ながく呑んであるさかな  
 寒い日のありどころ湖へ街をあるいて  
 おのづと落葉校門二三人づゝはかたまる  
 植の實に坂下りてしまふ河原  
 萱穂はつきりなびく茸僅かに持てり  
 桶に鱈魚生きて蝦がゐて霜朝  
 甘藷あつきをたべ鉢の一木青い葉  
 山徑石ころばかりこれば黄なかまきり  
 松露籠にみたし家へ歸り逕の海おと  
 かまきり枯くさいるにみんなに山みちが狭まり  
 現在山が夕明り山の田晚稻は刈らぬ  
 渡鳥大群みだれては風にさからひて飛ぶ  
 稻架場出はづれてから水田波立つばかり  
 深い水底より藻がゆらぎ眞盡  
 重い稻舟棹さしてゆくに橋々  
 冬の日海に入る川淺き澄みて  
 人のすがた冬近き日海への畑に  
 わがばたらくに朝の日本榿なか／＼に白し  
 糠の剩土が畑を少し埋めて草の芽

後藤零丁子

足達矩水

渡部湘雨

金子曙山

小川光明樹

桶錢塘

尾平涼々

降つて降りつゞいて今年十月瀬戸の海  
 大粒雨が音してゐて仲秋月明り  
 柑橘いまだし青し鉢を洗ふ  
 冬の日を牛の毛のひかる遠ちの山々  
 いなご干してあり箱が四角なるお天氣  
 秋の良い日和の日蔭からでて来る婆さん  
 隣同士冬菜の畝をもちし雨霽れた  
 初霞見る玄關一畝の冬菜  
 清淨その夜ダリヤに向つて坐り  
 楓の葉が落ちる葉ゆふべ飯どき  
 花葦原が續くわれらが刈る  
 葡萄一つ一つを味はふ友と居る食卓  
 地に蕪の種子おろすさちひと／＼日射し  
 少女秋の花束を捧げ持ち電車の雑沓に和し  
 歸り住むに兩日多し柿や栗やあり  
 栗みのる郷里のこの道たん／＼  
 松茸の匂ふを籠にいれし籠の重み  
 秋燕濁流渦紋を掠めては去り  
 網を打つ音土手がけり水面か／＼やき  
 草の實とべる一間人來れば豆を噛み  
 葉のみな黄銀杏立つ徑を人ら  
 けふわが紫蘇實をこく筐は地に置く  
 家うら工場跡の大根の育ちといふもの  
 妻とはたらくこの土が麥床の土  
 洪水あとの稻刈る根を洗つた大木の河邊

口田朴也

須貝秀

相場汀石

中根尉策

笠原大能露

藤田三六亭

石田鳴子

泉大暁

稲の穂に雨が降る雨が漏る家  
 茶の花が落ちるこゝに子とあそぶに地がぬれて  
 石踏黄なる日を稻刈りはじめ父にして  
 日あたる野菊の花にしつかりふみ立ちてわが子  
 沙汲むをとめすあしにふるゝ草の穂  
 時化つゞく夕の川盤掲げてくる男  
 ぎつしり麥蒔いた隅の方小菊いく株  
 吉例參賀の全員着席冬の日眞晝  
 屋敷に低き一木の蜜柑いろづき遅く  
 堪へてこの冬蓄もち傾き立てる椿の木  
 空は一面の灰いろ一つの山塊存在  
 爐邊素描いく枚爐邊ひとりいく時  
 入日にあゆむ萱はら穂のゆれやまざ  
 梨をもぐ梨棚のしたからひろいみづうみ  
 秋は山家のくれあかり河の瀬ひゞき  
 近き家へ稲に埋れた畔わたりゆく朝  
 壺中おのづから涼し鹽あり

加々美絹子

松原颯々

菅木葉

伊藤彌太

佐藤禾黄

田邊慶風

佐藤豁山人

半田雨衣

新田實三

麥稈帽子にて學童らのなかに居る吾が兒  
 みちびた茶畑の茶は青し人の足許  
 稲田の畦をくる男帽子をかぶり  
 露朝草刈る草の中人のこゝろ  
 やうやくたづね來糸瓜の花  
 いなごとのこどもらに赤し曼珠沙華  
 甘藷を揃る土がしめつてある畑  
 柚子がうれてくるを空を仰ぎし  
 甘藷をほる妻と少しはなれて  
 萩の花うるはし花の散りし黒土  
 島の短日傾き落つる日のいろ  
 冬ざれ道をゆく石ありぬれぬて大きく  
 草青々田の牛があるとはく  
 日も日もトロ押す人すかんほの花穂立つ  
 この人とこの夜の蚊遣眞直ぐゆれず  
 燈臺の灯くるくまはり秋草ぬれたるを踏み  
 菱の實をたべ彼岸會に居りて故郷  
 子供風に落ちたみかんと拾ひ來て彼岸會  
 日てり大樹落葉に埋もれある巖  
 まだ青い實南天數千株と平らな巨石  
 梢の寶石榴をとらんとしてある女が眉目  
 雁來紅あかと思ふをりをり裏山でなく山鳩  
 秋の日芦の湖を渡る富士のあたり空の厚雲  
 舟艇せんぶつないである土手の草實りたる  
 栗の實熟れた木のとつべんにある山の子

大倉親英

永井はるを

吉川規道

秋元櫻水

奥谷魚石

新田巢州

牧野秋風嶺

山本光玉

新田實三

山の松笠を燻べ山の栗を焼く火鉢  
 凍がゆるんだ土手に窓をあける家人  
 子供と栗飯いたゞく朝の栗の木みえる  
 尾花原ゆくぼくら籠のきのこがうごく  
 家の根あきらかに雨ふる夏菜をきる  
 湖邊のぼりたち祭にぎはひてゐるへ船つき  
 山茶花うごかず咲き墓につゞくみち  
 あへきのぼるに岩陰にて咲きつはぶきの花  
 庭にだりや剪り居る妻の顔が戻りて  
 すゞきが線路傍の家の灯に揺れてゐる  
 どんぐり噛み棄てし山みちしめりたる  
 木を伐る峽の霧がはれてくるもみち葉  
 寒さくる父のこゝろ葱を束ねる  
 家のまはり落葉ふる川の音たゆることなし  
 すでに小麥時く足の冷たさを少しおもふ人々  
 家にくるひと大根しろきを掲げて日暮れてゐる  
 女人和装やうつむきてゆく秋の日のみち  
 山に來て山里芋の畑のをんなたち  
 秋日くるゝみづげんごろう潜るにもあらず泳ぎ  
 土手上俵積んだ車の米俵小さく見えて秋雲  
 母と來てこゝに草抜いてなど空の雲低し  
 木々ぬれた朝窓下通る人々  
 女がゆく秋朝霧がぬれてゐた  
 よろしみぞそばの花山明らかにして並び  
 樹に冬芽のかたちありあなはい空

石岡水嶋

中村とし子

井上星樹

守矢日出男

神榮喧靜子

田部直枝

豊田芳生

中川尙三

野菊を生けて坐る朝霧が残り  
 赤い柿青い柿塚によつて日射し  
 この日和砂のぬくみの鯛大漁  
 鹽焼くけむり目の前すでに夕霧  
 雪蟲地にひくゞとび山が夕焼け  
 藁沓あたゝかく青い空からふる雪  
 爐火へ掌をかざし夕べの雪のあかり  
 稻刈る溝の底青みどる動がず眞晝  
 暮れて雲大きく動く麥を落す  
 西瓜を喰ふ黍の影に入りて憩ひし  
 もみづることく水に水草なく  
 この秋この巷にありお濼そのかたちあり一日  
 磯の秋こゝに鹽つくるほかひとの見えずある日  
 入日赤くかもめかもめ秋の沙地のつゞき  
 雨ふりみなざんげする家にて枝豆を食ふ  
 秋ぞら網をひきづりて來しをとこ幾人  
 山に木がすくなく僕やたら野菊の花を折る  
 砂地に子供すあして遊ぶ柿が二つ三つあかるい空  
 ふぐちりを食ひ腹すわつてくる庭ひえてくる  
 蔓草ならあげびならすつかり山に在る  
 おほかたは多物着てみんな大笑ひする  
 晩秋で河原でわがうしろを感じ  
 芒に陽があつた陽がなくなつた堤遠く横に  
 晝餉は野菊挿して眺めいまだんご皿にたべる  
 紅い葉を置き喫茶去

高橋日東子

島林庄作

伊藤二一郎

水戸太一

宮本夕漁子

中野健三

鹽野谷西呂

赤平生

稻刈りがつゞき照る日がつゞき大空  
 稻刈の一部落溝川涸れてゐる  
 稻刈に行く聲かけてゆく顔に朝日がさし  
 秋風木々を吹く家に魚を焼く  
 家裏藜色ついた空を吹く風  
 畑に葱青く山に雲動く見ゆる  
 友に指す方米代川冬めく水の色  
 遙けく宮城おろがみまつる襷すぐる窓際  
 はまなすの丘に立てり佐渡は暮色の彼方  
 みぞれて雁木行き交ふて港の灯  
 栗の穂を刈る生きてゐて冷ゆる日  
 神をもとめるこゝろ黄葉の山を見てゐる  
 雨の赤まんまあり徒歩連踏の枕木を黙々とゆく  
 巢を作る蜘蛛に夕べ雨足の明るく  
 あかりが點いてひろびる食卓の葎  
 あげがた稲を運ぶ子供が運ぶ兄弟  
 人に會ふたのしみ黍高くてみのり  
 山から下りし女籠の黄葎ぬれて  
 くるみおとす子ら僕菊ぬれた庭に立つ  
 灯の下子供硝子玉とあそぶ炬燵に遊ぶ  
 山家を出て山路一人で薊のむらさき  
 縁廣く籐椅子と龍膽と熱いお茶  
 雜葎も無うて團栗籠の中でがらがら  
 稲をこく人藁をくゝる人皆が動く  
 秋夜大根の葉さざむ母に黙つてゐよう  
 桃林に霜くる思ひ積ひくきに

平井青三  
 仙田黄蕨  
 大淵青柴  
 齋藤達也  
 中村常男  
 佐藤かめ雄  
 瀧浪龍雄  
 櫻澤喜作  
 新村満壽雄  
 丸山白水  
 蓬萊智子  
 長谷川千夜

子ら駆けゆく湖岸腐る藜草にほひ  
 おろされた篠懸の枝に月かけ  
 臥つて落花生食ひはじめた弟と私  
 ゆきあふに息白く言葉交し砂濱  
 葎の香消えず夕灯す母在り  
 しぐれる鴨を見つゝ雨が遠のく  
 霧近くは晴れる山谷を下る  
 青蜜柑ころがす吾子のほゝの太り  
 芹立つに向ふ一とこるの青空  
 冬日牛はいわれれが通る一人一人  
 雲の峰見えて百日草僕の家  
 京都を見おろす世の風を見下すけじめなく白  
 波音冬めき舟に聲なく舟まげら  
 林刈りあらけてあり鳥の聲高し  
 たそがれのこどもらは葉櫻のさくらんぼ  
 野良にゆく女たちに麥の實りたのもし  
 無花果の木が折れて颯風が過ぎた話  
 網に吐かれし藻草に秋日透いて海老はれ  
 晴れたまゝ暮れて宵の明星は月と共に  
 船の上にゆれるはつきりと雁を聞いてゐる  
 護岸工事へしぶきをあげる白い手袋はいてる  
 弟の顔が見えたり稻架の影水にうつり  
 足洗ふ小川の芹の葉流れるにふれる  
 干綱干間はせ釣の竿うごかない  
 水の流れ水音枴の實固く  
 男稻架木を運ぶに朝を鳥啼き

玉木和美  
 上木藥葉  
 梅澤若水  
 二宮秋歌樓  
 丸岡岳人  
 八木茶凡水  
 次郎三郎  
 伊東臥牛  
 吉田翠村  
 松村邦夫  
 財部津斗  
 佐青まさ  
 三島亥隆  
 草部松月  
 北島枯天  
 村井由武  
 小玉一水  
 村井凡人  
 小林露畝  
 渡部東迷路  
 近藤

編輯後記

○私達は昭和廿一年を以て新俳句再出發の年となしたい。本誌は努めて生きた問題を掲載し、元氣に満ちた若い入達の文章、活氣ある自由な論陣によつて本誌の使命を果してゆきたいと存じます。昨年再刊してから、急速に讀者の増加したのは誠に嬉しく結構なことですし、それにつれて編輯の更新その他のプランも山積してゐるので

稿を可及的早目に手渡し致居、その爲め原稿もずつと早目に切る關係上、送句の方が思はれるより一號遅れて送句發表となる場合多く、時によりては二號も遅れて發表の時もあります。右事情何卒御諒承置願ひます。

すが、紙の不足といふ問題をどうしようもないのは遺憾であります。その點はなほ暫くは現狀維持でゆかねばなりません故御了承願ひあげます。

○私信中にも發表したいものが多くありますが、皆さんの「聲」の掲載場所が目下のところなく善處方を考へてゐます。なほ「聲」は舊各社宛でも結構ですが、直接發行所へいただいたほうが事務上好都合であります。

○自由律俳句協會の設立を昨年中にと努力致しましたが、その運びに到らず持越されました。いづれ次號に於いて發表を見る事でありませう。

○最近發送の本誌が「不明轉居」等の附箋附で返送されるのが多く、皮肉にもその後から「未着」の督促を受けること頻々です。戦災により御轉居の方、疎開地より復歸の方等、是非確實な御住所を發行所宛御一報願ひあげます。尙發行所宛の郵便物は西垣方俳句日本社と御記入の程願ひ上げます。(正禪子)

投稿略規

○俳論、隨筆等、(なるべく簡潔なるもの)

○俳句日本作品(社選)

○句數十五句以内、楷書にて清記、居所氏名を詳記のこと。

○選句録作品

○萩原井泉水選のもの 神奈川縣大船町建長寺前萩原井泉水へ

○中塚一碧樓選のもの 世田谷區上馬町三ノ一〇五〇中塚一碧樓へ

○西垣卅禪子選のもの 足立區伊興町狹間八八七西垣卅禪子へ

○句數十五句以内、楷書にて清記、居所氏名を詳記のこと。

○句稿は右三氏のうち一人に宛て直接その住所へ送稿されたり、一人一月一稿、一選者に限る事。

一、締切 毎月十五日

一、購讀誌代の拂込は従前通り舊各社の發行所宛に小爲替にて願ひます。但し新購讀者に限り必ず「新」と明記して「俳句日本社」へ送金せられたし。

本誌定價

一冊分 金一圓(送料別)

六冊分 金六圓三十錢(郵稅共)

十二冊分 金十二圓六十錢(同)

○前金(なるべく小爲替)で御拂込下さい。

○必ず何月號よりと御指定の事。

○御轉居の際は發送部宛御報下さる。

第二卷 第三號

昭和二十年十二月廿五日印刷納本  
昭和廿一年一月一日發售

發行所 中塚直三

編輯人 西垣隆滿

印刷人 石上利雄

東京都立川市曙町三丁目五番地

印刷所 行政學會印刷所 東京五

發行所 俳句日本社

東京都足立區伊興町狹間八八七

配給元 日本出版配給株式會社

東京都神田區淡路町二ノ九